
さよならラララ

mihiro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよならラララ

【Nコード】

N0947K

【作者名】

m i h i r o

【あらすじ】

一番そばにいても伝わらない想い、気付かない気持ち。幼なじみに恋人が出来て変わっていく二人の関係。アヤカ・ユウキ不器用な二人の恋の物語。

《5万PV突破しました！皆様読んでくれてありがとうございます。》

》

*物語の流れとして一部R15的な表現かと思いいR15キーワードを追加しました。あくまでシリアスな内容ですが、苦手な方はご了承ください。

二人から一人（前書き）

初めての小説

誤字脱字だらけかも…。

マイペースにがんばります。

*所々書き直してます。よかったらまた読み返してみてください。

二人から一人

こんな気持ちになる日がくるなんて……。

突然突き付けられた現実に気持ちが付いていかない。

「……え？」

彼のサラサラの前髪が色づく頬にかかっているのが眩しい。

思わず目を細める。放課後の傾いた日差しが廊下に射し込んで、宙を舞う埃たちがキラキラ光ってる。

まるで現実感がない。

「今日から、か……彼女と帰るから……」

突き付けられた現実。

恥ずかしくて仕方ないというように彼の頬は次第にピンク色に染まっていく。

こんな顔見たことないよ。

ずっと一緒にいたのに……。

「ユリちゃん？」

「ああ……うん」

恥ずかしくて仕方ないように目をそらしてソワソワする彼の仕草にグラグラする足元。

「わかった……ユリちゃんによろしく」

平静を取り繕って口の端を上げた。なんとか笑顔らしいものにな
ってるだろうか。口元が引きつるのが分かる。

「ん、ゴメンな……気を付けて帰れよ」

「うん……」

明らかにおかしい反応にも彼は気付かない。

心はもうカノジヨの元へ。

少し気遣わしげに柔らかく笑って、足早に廊下を駆けていく。
その先にユリちゃんが待っている。

ユウキの初めてのカノジヨ。

こんな思いをする日がくるなんて……。

「アヤカ？」

教室に戻る私に友達のエミが心配そうに声をかける。

「すごい顔色。大丈夫？」

「エミ……」

心配してくれるエミにも曖昧に微笑むことしか出来ない。

「うん……大丈夫」

なわけない。

「なわけないじゃん。貧血？保健室行く？」

心を読まれてるかのような反応にやっと少し笑えた。

「本当、大丈夫。あと帰るだけだし」

あと帰るだけ。さっきのユウキのはにかんだ笑顔と一人の帰り道。
それを思つとズンと気が重くなる。

これからはもうずっと一緒には帰れない。

今までのようにユウキとずっと一緒にはいられない。

「……大丈夫ならいいけど。私は一緒に帰れないしアヤカは貧血持ちなんだから。無理はしないで」

本当に心配そうなエミに思わず苦笑する。エミはいつだって私に過保護だ。

「ありがとう。だいたい方向も違うんだし、心配しないで」

委員長をやってるエミはいつも帰りが遅い。家の方向も真逆。

ユウキと一緒に帰ってること。

ユウキと幼なじみだということ

それ以上の「私のキモチ」をエミは一番知ってる。

ユウキにカノジョができたことも、そしてたぶん、今日からも一緒に帰れないことも……。

「じゃあ私行くから。気を付けて」

肩をポンツと叩いて出てくエミ。

エミを見送ってから、教室の窓から校庭を見る。

サッカー部は今日休みらしい。ユウキはサッカー部の二年。ユリちゃんはサッカー部のマネージャー。

まるで物語みたいな恋愛。脇役に追いやられた私には暗幕の裏で出番すらない。

小さい頃からの腐れ縁。

親同士の付き合いでユウキと私はずっと一緒にいた。

反抗期も、思春期も

これからもずっと一緒にいられると思ってた。

私がユウキを想うように

ユウキも私を想ってくれてるのだと、ずっと信じていた……。

考えてみればイタイ女かもしれない。

「ユウキくんからは恋愛の匂いがしない。

まだ男の子って感じ」

まえにエミが言ってた。

まさにそうだったんだ。でもそこが良いと思ってた。今は、それでいいと思ってた。一緒にいられればそれで。

まさかユウキが恋に目覚めるその相手が、「私」
ではないなんて考えたことなかったから。

ユリちゃんに告白された1週間前

ユリちゃんと付き合い出した3日前

部活の無い日はいつも一緒に帰ってたのにもう一緒に帰れない今日。

この事実がこんなにも辛いなんて……。
信じていた世界が足元からグラグラと脆く崩れていく。
その現実を認めるには余りにも長く二人の絆を過信しすぎた。

私は誰もいなくなった教室で、流れる涙をそのままに、
先の見えない真っ暗な世界へと一歩踏み出す勇気をため込んでいた。

キミへの想い（前書き）

アヤカ目線

>ユウキのこと<

キミへの想い

ユウキは無口で照れ屋。 女の子と話すのは苦手。

付き合った女の子の数や下心だらけで合コンや流行の服の話ばかりしてる男の子達とは少し違うタイプ

サッカーのポジションは小学校の頃からずっとディフェンダーで身長も高くて体格も結構しっかりしてるし

サッカーをしている時は普段とは打って変わって大きな声を出して指示を出し体を張って全力で競り合う。

その姿はとても頼もしい。

チームメイトからも信頼されていて、同性の友達が多くて女友達なんて聞いたことない。

キヤーキヤー騒がれることはないけど少し見る目がある女の子たちはみんなユウキが誰とも付き合わない事を不思議に思ってたんじゃないかな。 それとも私と付き合ってると思ってたのかもしれない……。

私がそう思ってたように。

親絡みで生まれた時から幼なじみの私達は、一緒にいるのが当たり前だった。

家族ぐるみで行楽や旅行に行ったりする延長で、暇があれば二人で映画にいったり、公園や遊園地にいったり。 1日中一緒に遊んだりもしてた。

さすがに男女の違いを意識する頃になると、お互いの友達との付き合いを優先して二人で出かける回数は減っていったけど。

同じ高校を受けることになった時
私は自分の気持ちに気付いた。

一緒だったらいいなと思った。
これからずっと。そしてこの気持ちも。一緒であるように願った。

高校に入ってユウキの部活がハードになって、あまり一緒に帰ったり出かけたりは出来なくなってきた。

でも誕生日やお祝い事やお盆、正月は必ず集まる家族同士だったから、

私たちが離れていく感じはしなかった。

今思うとそれがいけなかったのかなあ。

あんまりにも家族のように兄妹以上に一緒にいすぎた私の想いを口にするにはなかったし
ユウキの気持ちも確認することはなかった。

それとも私はうつすら気付いてたんだろうか。

もしかして
もしかしたら

ユウキの中に私への想いはないって。

本当のこと聞くのが怖くて
目を逸らして
耳をふさいで

気付いたら一方通行……。

こんな思いをする日がくるなら。とっと言ってしまうえば良かった。

どうせ私から離れてしまふなら想いを確認すればよかった。

ダメならダメで今ごろ私も他の男の子を好きになってたかもしれない……。

なあんて。

こんなにユウキじゃないとダメでユウキ以外に考えられないことに今更ながらハツとする。

そして行き場のない想いを持て余して。

またユウキの事を想うんだ。

エッセイの考察（前書き）

アヤカのこと

> エッセイ目線 <

少し書き直しました。

エミの考察

あ、また呼び出されてる……。

昼休み、放課後。

ほとんど毎日呼び出されたり、声かけられたり、手紙もらったりしてるアヤカ。

当の本人はただただ呆然とするばかりで

さつき「人生の中で初めてこんなにモテてる……」

とさして嬉しくもなさそうに呟いてたし。

そりゃそうだろう

今までアヤカの人生の中に男はユウキくん以外いなかったんだから。

中学からの付き合いだけど

アヤカの艶やかな長い髪や

大きくはないけど黒目がちな瞳

整ったやわらかいアーチの眉に

少し大きめのくちの周りを彩るグロスいらすのピンクの唇

小さい丸顔に色白ではないけどほんのり黄味がかった肌色が、嫌

味の無い幼さが残る可愛さを出してる。

化粧いらずで羨ましい。

そう言うつと

「エミみたいにキレイになれるなら化粧をしたい」と可愛いことを言う。

私は化粧前、化粧後の顔が違うタイプだけど、

つまりアヤカは天然美人。

中身も少し天然か。

何しろ今まで浴びてた男たちの視線を一度も感じたことがないというんだから。

ほぼ生まれてたてからずっと一緒だったユウキくんが離れて、今まで遠巻きに見てた男共がわらわらと、

産まれたての雛に餌付けや刷り込みをしようとしてるかのようになり集まってきた。

雛は言い過ぎ？

「エミっ。どうしよう……」

おろおろしながら駆け寄ってくる姿はヒヨコにも見える。

あながち間違っていないかとクスリと笑ってしまった。

「笑い事じゃないよ」

フウーと大きなため息をつくアヤカ。

たしかに……。

ユウキくんに彼女が出て、

アヤカとユウキくんが行動を共にしなくなってから、毎日続く私たちのアピール。

ずっと想ってた本気から、

可愛いってことで唾つけるようなマーキングまで入れるとどのくらいになるか……。

少し同情する。

でもユウキくと離れてからのアヤカの落ち込み様は、はたから見てもとても痛々しかった。

一体何日目を真っ赤にしてきただろう……。

アヤカを想ってきた男たちが黙ってられなかった気持ちもわかる。

ユウキくんも悪い奴ではないんだけど。

正直そこら辺の男たちよりは一目置いてる。

歳の割に落ち着いてるっていうか、

サッカー馬鹿っていうか。

変にチャラチャラしてないし筋の通った男気を感じる。

本当の意味での優しさを持ってるとらだろう。

ただし恋愛感情にはかなり鈍い。

まあそれもアヤカとずっと一緒にいたせいもあつたんだらうけど……。

こんな可憐なタイプの女の子がずっと傍にいれば恋愛的に麻痺するかもね。

「ちょっとエミく？ 他人事だと思って楽しんでるでしょく？」

机に顎をつけて上目遣いで私をにらみつける。

その姿もある意味艶かしい。

まあ無意識だらうけど……。

男たちはそんなアヤカに翻弄されるのかもしれない。

鈍感なユウキくんを除いて。

「まあまあ、今だけ今だけ。そのうちアヤカの本性知れば冷やかしくもなくなってくるでしょ。」

茶化してみれば

「本性？ それが出ればいいのね？ よし！ ……ってか私の本性って何？」

とまじめに返ってくる。

笑う私に真っ赤になって怒るアヤカ。

「なによ、もっとわかりやすく言って。エミだけが頼りなのに……」

可愛い奴。

男の子たちがほっとかないのもちょっとわかるかな。

アヤカにはかわいそうだけど、

まだこの雛は周りから狙われそう……。

二人のこと（前書き）

ユウキ・アヤカ

二人のこと

> ユリ目線 <

二人のこと

ずっと二人は付き合ってるんだと思ってた。

たまたま部室で二人になった時ユウキくんに思い切って聞いた
「……え！？ アヤカと俺が！？ なんで？ 全然そんなんじゃない
くて……」

余りの動揺と真っ赤になった顔は、逆に本当は好きなのかと思っ
た程。

「ただの、お、幼なじみだけど……」
でも不思議そうにそう答えてくれたから、
私も正直に言えた。

「あの……私、ユウキくんが好きなの。……付き合ってくれませんか？」

我ながら大胆だったとは思う。でも、今しかないって思った。

無口でシャイだけどいつも部費が遅れる他の部員に、ちゃんと催促
してくれてたり。

汚い部室の中ユウキくんのロッカーはいつも片付いてて、
ボール拾いしてるときいつもちゃんと「ありがとう」って小さな
声で言ってくれる。

そんな彼が大好きだったから。

女の子達にもユウキくんの隠れファンが多くて、それに……。

住谷さん。

住谷アヤカちゃん。ユウキくんの幼なじみ。

一緒のクラスにはなったことはないけど。ずっとユウキくんとい
緒にいるのを見てた。

最近は何活も忙しくなってきたせいかあまり二人でいる姿を見な
かったけど……。

ユウキくんを好きになつてから、二人の姿が臉から離れなかつた。きつと住谷さんはユウキくんのこと、好きだ。部員のみんなからも口々にユウキくんは恋愛に鈍い。っていわれてるし

当のユウキくんは気付いてないみたいだけど……。

私の告白の返事も

「俺、色々鈍いし、付き合うつてよくわかんないんだけど……」
って言われて、ああ私振られちゃうんだなあって涙ぐんでたら、
「そ……それでも、よければ……」
慌てた様子で後に続いた言葉は、
小さくて聞き逃しそうだったけど、予想外の言葉。
ダメ元だったから、嬉しくて涙が止まらなくなって、早速ユウキくんを困らせちゃったんだ。

あれから、私にとっては夢のような日々が続いてる。

ユウキくんは優しい。

部活がある日もない日も毎日一緒に帰って、遠回りなのに私の家まで送ってくれる。

こないだ初めて手をつないだ時は、
本当に嬉しくてドキドキした。

ユウキくんからぎこちなく繋いでくれた手は暖かくて、二人で無言で真つ赤になりながら私の家まで帰った。

友達からは

「中学生でもあるまいし」とからかわれるけど、でも平気。私達には私達のペースがあるから。

ユウキくんはこんなにモテてるのに、自覚はないし初めて付き合うつて聞いて少し驚いた。

私も中学のとき、おままごとのように付き合った程度だから同じ

ようなものだけだ。

ただ時々出てくる、

「アヤカ」

という単語が、

私の心にチクチク刺さる。

生まれてすぐからの家族ぐるみの幼なじみで、ずっと仲良かったわけだから仕方ないんだけど。

昨日の一言はキツかったな……。

いつものように二人で帰る時、いつもそんなに喋る方じゃないけどすごく無口でなにか考えてるように見えた。

「どうかしたの？」

ハツとしてから少し気まずそうに、

「ユリちゃんは……好きでもない男たちに声かけられたり、告白されたりしたら……どう思う？」

「どうって……」（住谷さんだ……）

私がユウキさんと付き合うことになってから、住谷さんが男子にすぐ声かけられてる事は、他のクラスの女子の間でも話題になる程だった。

三年生からも声かけられてる姿はとても目立っていた。

でも住谷さんはいつも困ってる態度しか取らないって聞いている。

ユウキくんが気になるのも分かる。

でも……。

ユウキくんの口から住谷さんの話は聞きたくない……。渦巻く黒い気持ち。

私はユウキさんと付き合い始めてから「嫉妬」という言葉を身を持って理解した。

結局その話はユウキの

「なんでもない」

って一言で終わりになったんだけど。

なんでもない訳ないってことは分かり切っていた。

今、ユウキくんは私と一緒にいるけど。

時々……いや、いつも私にはユウキくんの中に「アヤカ」が見える。

仕方ないという言葉で濁せない程、その影は私を脅かす。

早く……早く消えればいい……。

私が消すことが出来るんだろうか。

私は彼の中の彼女を見ない振りをして彼に聞く。

「手……つないでいい？」

真っ赤になつて優しく頷くユウキくんの手を、

彼自身を。

離したくない……。

私は彼に染み付いている、

その影を消す方法を一生懸命考えていた。

ユウキの混乱（前書き）

アヤカのこと

> ユウキ目線 <

ユウキの混乱

「お前とアヤカちゃん、本当に付き合ってたのな」

もう何度言われただろう。前からちゃんと答えてたのに……。

それにしても、聞かれる回数に驚く。こんなに聞かれるようになったのはいつからだろう。放課後の少し疲れた動きの鈍い頭でぼんやりと考える。

廊下で、校舎裏で、下駄箱で、アヤカが男に話し掛けられてるのを見かける。あんなに男友達だち多かっただろうか？

(……違うよな) 男友達って雰囲気じゃない。

なんていうか……。もっとこう……。

放課後部室に向かいながら考えがまとまる前に、アヤカの友達の
新藤 エミの姿が目に入った。

「新藤！」

思わず呼び止める。

驚く顔で振り返る。

「ユウキくん」

「これから委員会か？」

「そう。ユウキくんは部活？」

「ああ、うん」

呼び止めたものの言葉が続かない。

「アヤカは……帰った？」

「アヤカならさっき男子に呼び出されてたけど？」

胸の奥の方からざわざわっと嫌な感じがする。

「呼び出されてたって……。」

「気になるの？」

思わず黙る。新藤は少し苦手だ。何もかも見透かされてる気がする

る。自分でも気付かないことも。

「……少し」

クスツと笑う新藤

「アヤカがモテたら、ユウキくんは困るの？」

(やっぱり……)

最近のアヤカの周りの男はみんなそういう目的なんだと思うとなんだか落ち着かなくなる。

「アヤカは……どう……」

言いかけて、意地悪く光る新藤の目になんとなく居心地が悪くなつて目を反らす。

「アヤカがどう思ってるかわからないけど……。アヤカにも恋する権利はあると思うけど。」

近いうち彼氏とかできるかもね」

ハツとし新藤の顔を見る。

「ユリちゃんは元気？」

突然の会話の切り替えについていけず思わず生返事。

「あ、ああ。」

「そう、仲良くね。」

意味深に笑つて立ち去る新藤をなんとなく姿が見えなくなるまで見送った。

そろそろ部活に急がなければ。混乱している頭を整理しようと思ふき出す。

アヤカにも恋する権利はあると思うけど

近いうち彼氏とかできるかもね。

なぜか胃の辺りが重くなりました、思考が止まる頃部室につく。

今日は紅白戦がある。その前にミーティングも。来週は練習試合がある。その為にサッカーモードに切り替える。(とりあえず、急

「うう」

急いで入った部室には同じ二年のタカヤだけ。

「おう、めずらしく遅かったな」

「ああ……」

「あ、先生も少し遅れるってよ。ミーティング前に自主トレしとけ
って」

「そうか……」

少しホツとして肩の力を抜く。

「そういえばさっきアヤカちゃん見かけたわ」

タカヤがベンチでスパイクの紐を結びながら言う。

ギクンツ。

まただ……変な感じ。無言で見つめると

「男に告られてたぜ」

とニヤリと笑う。

ああ、そう

何気ない返事という言葉が出てこない。無言で見つめつづけられて何
か思ったのか手を止めるタカヤ。

「おまえら本当になんでもなかったの？」

繰り返される問いかけに少しうんざりしながらいつもと違うニユ
アンスに気付く。

「……なんで？」

「まあ、ユウキには可愛い彼女も出来たしな。ずっとアヤカちゃん
とあんまりなんでもないとか言ってるから、俺はまた嘘か女に興味
ないかと思ってたぜ」

相変わらず極端な発想のタカヤに苦笑する。

「……まあ、今まではサッカーばっかだったし、
アヤカは幼なじみだし……」

タカヤの言わんとすることがはつきりせず、なんとなく答える。

「幼なじみだつて恋愛できるだろー?」

「そうだけど……」

考えたことのない言葉に目を逸らしながらごまかすように着替えを続ける。

「しかもあんな可愛い子じゃん。……まあユウキらしいっちゃらしいか」

少し馬鹿にされてる気がして 勝手に頬が熱くなるのをジャージの襟で隠す。

「でも本当なんでもなかったんなら。俺も狙っちゃおうかなあ?」
なかば独り言のように呟くタカヤ。

ガチャンツ。

驚いて思わずスパイクを滑り落とす。

「わっビックリした。おいおい、大丈夫かよ」

「あ、ああ……ゴメン」

動揺を隠すように俯いてごそごそとスパイクを履きながらタカヤの様子を伺う。

「タカヤ……アヤカのこと、好きだったのか?」

「好きっつーか、うちのガツコウ女子のレベル結構高い方だけどアヤカちゃんはかなりハイレベルでしょ」

(ハイレベル……?)

「今まではユウキがくつついてて声かけられなかった奴らとか上級生も結構狙ってるみたいだし

ライバルはかなり多そうだけどなあ」

何も言えずにノロノロと着替えてると

「さて、行こうぜ。ってお前まだスパイク履いてんの?」

早々と準備の終わったタカヤが笑いながら茶化す。

「何?アヤカちゃんのことそんな気になる?」

かあつと熱くなる頬。

「……お、幼なじみだし」

「またそれかよ。まあアヤカちゃんも急にわらわら言い寄られてビツクリだろっけどね」

先に行くというタカヤを見送りながら
いろんな男達に言い寄られて途方にくれてるアヤカの背中を思い
浮かべる。

困ってるのだろうか。

なんだかますます頭が混乱して、考えが続かない。　まだ自分に
彼女が出来たことにもいっぱいいっぱいなのだ。

思考を止めて再び着替えを再開する。（今は、自主トレのメニュー
を組み立てよう）

自分は器用な方ではない。ただ、目の前のことをこなすことしか
出来ない。とりあえずアヤカのことには出来るだけ頭の奥へ閉じ込め
た。

今度アヤカにも聞いてみようか。

「よしっ！」

そう区切るとパンツと顔を叩いて部屋を出た。

それぞれの想い&1t;アヤカ>t; (前書き)

アヤカ×ユウキ

>アヤカ目線<

それぞれの想い&It;アヤカ>

「アヤカー！ ヌウちゃん来てるよ」

朝、自分の部屋で学校の準備をし終わる頃、母の呼ぶ声が聞こえた。

ユウキが……？

驚きと共に胸が大きな音を立てる。

中学くらいまでは一緒に学校に行くこともあった。でも二人が通う高校のサッカー部は朝練が必ずあって、バラバラで登校するのが当たり前になっていた。

なんだろう？ 何かあったのかな？

鏡でパパツと前髪を整える。火照る頬を押さえながらはやる気持ちを落ち着かせる。

出来るだけ平常心を装って、足早に家を出た。

「…おはよ」

朝日の中、門にもたれて少し照れくさそうにしてるユウキ。

「お、おはよー」

どうしても嬉しくなる気持ちを抑えられなくて思わず駆け寄る。

「どうしたの？ 今日は朝練ない日？」

「うん……」

「そっか。なんか久々だね」

「そうだね」

いつもの柔らかい微笑み。あんなに辛かった胸がいつぱいになる。単純な自分に苦笑する。何も話さないでただ隣を歩く。

それだけでなんだかすごく幸せな気持ちになってきた。私って本当にユウキじゃないとダメなんだな…。と実感する。

実は最近、何度か声をかけてきた男子と帰ったことがある。でもなんだか緊張して何を話したかも覚えてない。ユウキっていると全然違っつてことに改めて気付く。

街並みも空も鳥の声も今日はすごくハッキリとても澄んで見える。
好きって気持ち一つでこんなに違うんだな。

ユウキはユリちゃんと帰るとき、こんな気持ちになるんだろうか。考えたら胸がぎゅっつと締め付けられた。息がしたくて、ユウキを見上げる。

するとユウキも私を見てたのかバッチリ目が合った。思わずドキツとする。一度目をそらして再びこっちを向いたユウキは、どこか何か言いたげだ。

「どうしたの？」

「最近……」

「最近？」

「……どう？」

「どうって……」

あんまりにも曖昧な質問に肩透かし。ユウキは時々、本当に言葉足らずで分かりづらい。しかもその後も無言。何か言いたくて言えないことがあるんだろうか。

ユリちゃんのことかな……。痛む胸をそつと押さえてできるだけ明るく聞いてみる。

「ユウキこそどう？ユリちゃんと仲良くやってる？」

「……まあね」

地雷踏んだ気分。自分で聞いて自分で自爆だ。

「そつ……だよね」

ただ前を見て歩き続けているユウキに戸惑う。

最近は朝練があるとはいえ朝迎えに来ることなんてまずなかった。なにか余程のことがあったんだろ。少ない言葉から私も考えられることを思い浮かべるが、とくに思い当たらない。　　というか、つまり私は今、浮かれているのだ。

「最近……困ったこと、ない？」

「え！？　困ったこと？」　突然の思いがけない言葉に慌てる。

こないだの小テストが赤点だったこと。制服の裾が破れたこと。間違っ見てないドラマに重ね撮りしてしまったこと。どれもユウキは知らないことばかり思い付く。

もう一つ、あるとすれば、（ユウキとユリちゃんのこと。）

一番言えない事を思い、溜め息をつく。

黙って考え込んでると、

「こないだ、呼び出されてなかった？」

「え？」

「三年とか……他にも。こないだタカヤと一緒に帰ったんだろ？　その時最近困ってるって言ってたって聞いて……俺には話せないの？」

余り見たことのない、少し強い口調のユウキに驚く。

「……話せないっていうか」

見上げて昇りはじめた太陽の影になって、ユウキの表情がよく見えない。ユウキはユリちゃんと付き合いだして、色々忙しそうで

（私のことなんて……）

「……興味ないかと思ってた」

ふいと向こうを向いてしまうユウキ。その耳は少し赤い。

「心配……してくれたの？」

「……まあ……」

一気に首まで赤くなるユウキに私まで恥ずかしくなる。

そうか、気にしてくれてたんだな。

「……ありがとう」

胸にあたたかいものが広がる。思わず泣きそうになって慌てて目

頭を押さえる。

最近の涙腺の緩さは本当に困る。

「……………」

心配そうに覗き込むユウキ。そんな何気ない仕草に、胸の中に強い思いが一杯に広がっていく。

「……………なんかあれば俺になんでも言えよ。相談のるから……………」

「うん……………」

ユウキの甘い言葉にクラクラ眩暈がする。

いつもそうだった。ずっとそうだった。だから私は安心してた。

(……………でも違った)

何もかも私の思い込みで勘違い。ユウキに彼女が出来てから、私は一人なにも見えない暗闇に投げ出された気分だった。優しい言葉も、親切な態度も、特別だからではない。ユウキの優しさは私だけのものじゃない。

ユリちゃんがいるくせに。

いつものユウキの優しい態度も今は私を卑屈にさせる。一緒にいるとうれしいのに、苦しい。

「……………でも、大丈夫だから」

なにも大丈夫ではないのに、卑屈な自分が強がりと言う。

「ユウキにはユリちゃんがいるんだし、私は私で……………」

勢いで答えるが続きは思い浮かばない。

いつか、また私も恋をするんだろうか。彼氏が出来たりするんだろうか。

ユウキ以外の誰か。考えたこともないことに言葉が続かない。

「タカヤとか？」

「え？」

思いがけない名前が出てきてユウキの顔を見つめる。

一昨日、たまたま部活がないとかで校門でタカヤくんと偶然あ

って、話の流れで家まで送ってくれた。ただそれだけなのだけど。クラスは違うけどユウキのチームメイトで仲が良い。

他の男子と帰るよりは気が楽で、最近の私の様子を心配して話を聞いてくれたのだ。

「タカヤくんとは呼び出されたりする事、少し話をしたただだよ……」
「まだ捻くれてる自分を押さえられない。なにがそんなに気になるのだろうか？」

どうしてそんなに心配してくれるんだろう？
なんでそんなに優しいの？

彼女できたくせに。私を突然一人にしたくせに。
ドロドロとした物が体中を蝕んでいく。

ずっと一緒にいたユウキとの優しい思い出も、小さなときめきも、すべてがグレーに染まっていくような感じにぞつとした。

「アヤカ……？」

自分の名前を呟く声が聞こえた。

私の中を見透かされた気がして、ゆっくりと見上げる。

私を見つめる茶色掛かったその瞳。サラサラの癖の無い少し長い前髪。心配すると少し眉間に皺がよって、困ったような泣きそうな目になる所。昔から何も変わらない。

ユウキはユウキだ。

目の前のユウキは、まだ自分の知ってるままの彼に見えた。

制服のポケットに隠れているだろう大きな左手を見つめる。

小さな頃のように、手を繋ぎたかった。今とても心細くて、この

暖かな手に触れられたらどれだけ安心するだろうと思う。でも、それは彼女の特権。

前に見かけたユウキとユリちゃんの手を繋ぐ後ろ姿を思い出す。

彼女ができて、変わらず優しくてこうして心配してくれるユウキ。

再び顔をあげる。一人で百面相をしてる私を、大きな体でそっと伺うユウキを見て、自然と力が抜ける。

ユウキを困らせたくない。
自分の気持ちに蓋をする。

「……いつも、ユウキに甘えてたけど。もう、これからは一人でも大丈夫だから……」

一言、一言、自分に言い聞かせるように。

「心配してくれて、ありがとう」
不思議そうな驚くようなユウキの顔。

伝えられない気持ちを込めて微笑む。

学校が近づいてきた。

知ってる顔がちらほら見える。もう二人で登校することはないかもしれない。ゆっくり噛みしめるように学校まで歩きながら、ユウキに甘えきっていた自分にさよならしようと思った。

さよならラララ。
そんな詩があったな。

中学の時に大好きでよく読んでいたお気に入りの詩人の恋を失う
詩。

失恋の詩なのに、前向きなのが良かった。

二人はきつと新しい関係になっていける。
切なく痛む胸を励ますようにそう言い聞かせた。

この時の私は、自分の気持ちに夢中で、
変わるといふことがどういふことなのか
全然分かっていなかったから。

それぞれの想い&Ite・ユウキ&get・、(前書き)

ユウキ×アヤカ

>ユウキ目線<

それぞれの想い&It;ユウキ>

インターホンを押して玄関の前で待つ

数えきれない程来てるのに……。なんだか少し緊張してる自分が笑える。

「アヤカー！ ユウちゃん来てるよ〜」

住谷家の中からサキおばさんの元気な声が響く。

深呼吸をして、まだ昇りきっていない朝の日差しを見上げた。

扉の開く音、少し足早に階段を下りてくる足音。

「おはよ」

「お、おはよー」

少し癖のある長い髪を揺らしながら笑顔で出てくるアヤカ。何度も何度も見てきた風景なのに、なんだかすごく久しぶりな気がする。そう思っているとアヤカも同じようなことを言う。同じこと考えるんだな……。そんな気やすさにホッとする。

最近のアヤカのことはずっと気になってたけど、帰りはずっとユリちゃんと帰っていて話す機会がなかった。

ユリちゃんとの帰宅は日課になっていて、断る理由もなかなか思いかず。めずらしく朝練がない今日、思い切ってアヤカと登校しようと思つて誘いに来た。

他にも気になることがあるし。

見下ろすとアヤカの斜め横からの顔が見える。ずっと当たり前みたいにこの距離にいたのに、少し違ったように見えるアヤカの表情。俺はアヤカのこと、なんにも知らなかったのかな……。最近、どんどん湧いてくる疑問に自分でも手に負えなくなってきた。

でも、いざとなったら何を聞いたらいいかわからず、言葉をアレコレ選んでいたら、

ふっとアヤカがこっちを見上げた。思わず目を逸らしてしまう。
(なにやっつてんだ?)

気持ちを落ち着かせて再び不思議そうに見上げるアヤカに向き直る。

「どっしたの?」

なにから聞いっつ。

「最近……」

「最近?」

「……どっ?」

「どっつて……」

呆れ顔をされる……。たしかに、我ながら間抜けな質問だ。なかなかどう言葉をつなげればいいのか思いつかないで焦ってたら。

「……ユウキこそどう? ユリちゃんと仲良くやっつてる?」

逆にされた質問に気まずさを感じる。

実は最近、帰りもなんとなくうわの空でユリちゃんを怒らせてしまったのだ。

原因はというと、アヤカに最近のことを聞くために忘れないように色々考えてたから。

自分でも呆れる程ひとつのことしかできないのだ。

ユリちゃんの怒る気持ちもわかる。

「私といるときは私のことだけ考えてほしい……」と涙目で言われた時、胸が痛んだ。

タカヤに言わせれば、

「ユウキは女心がわからなすぎ」「なんだろう。」

社交的で器用に人を虜にするタカヤには何もかなう気がしない。少し軽い気もするけど男前だしで人気があるのも頷ける。

いつも明るい髪を手ぐしセットでオシャレに決めていて、いろんな女の子に声をかけてるけどけして遊び人なわけじゃない。勘もよくていわゆる女心がわかるタイプだ。

似てるんだよな……。

それは身近な誰かを彷彿とさせた。つまり自分とは正反対なタイプ。だからこそ気になる存在。

「……まあね」

とりあえず無難に答える。

黙ってたらまた誤解を生んでしまう。焦りながら前を向いて考える。

遠回しに聞くのはむいてない。

(はつきり聞こう)

「最近……困ったこと、ない？」

「え！？ 困ったこと？」

驚くアヤカ。

なかなか答えてもらえず勢いで言葉を続ける。

「こないだ、呼び出されてなかった？」 「え？」

「三年とか……他にも。こないだタカヤと一緒に帰ったんだろ？ そんな時最近困ってるって言ってたって聞いて……俺には話せないの？」
目を丸くしているアヤカ。

何も言わないアヤカにこんなにも苛立つてることに今更気付く。

タカヤには話したのに……。そのことが苛立つ気持ちに拍車をかけて、思わず責めるような口調になってしまう。

「……話せないっていつか……」

戸惑う表情で小首をかしげるアヤカ。

「興味ないかと思ってた……」

アヤカの言葉に、自分のキモチに、思わずカツと赤くなって顔を背ける。興味ないならこんなに悩まない。

「心配……してくれたの？」

「……まあ……」

自分でも首まで赤くなってるのがわかる。

「……ありがとう」

つぶやく声はとても柔らかかった。

見るとアヤカはうつむいてる。

言い方キツかったんだろうか。

思わず覗き込みながら慌ててフオローの言葉をさがす。

「……なんかあったら俺になんでも言えよ。相談のるから……」

「うん……」

小さな返事があってほっとした。まだ聞きたいことはたくさんあった。

でも、アヤカといるとなんだかどうでも良くなってくる。

思えばいつでもそうだった。小さな頃からアヤカといると居心地がよく、まわりが恋愛だのなんだの言ってるときも、サッカーに打ち込めたのはそばにアヤカがいたからかもしれない。

今更そう思う自分を不思議に思っていると、

「……でも、大丈夫だから……。ユウキにはユリちゃんがいるんだし、私は私で……」

そう呟くアヤカの声が耳に届いた時妙な焦りに襲われた。

アヤカはアヤカで…？

誰かと付き合うとか？

最近言いよられた奴で気になる奴がいるんだろうか？

誰だ？

どんな奴？

三年とか。

それとも……。

身近な顔がよぎる。嫌な汗。

「……タカヤとか？」

自分の声が思った以上に硬く響いた。

驚いた表情のアヤカ。

「タカヤくんとは呼び出されたりする事、少し話をしただけだよ…」

タカヤは違うか……。自分のことは棚に置いて、やたらとアヤカの相手が気になる。

好きな奴がいるのかな……。

そう思った瞬間、胃が胸かぐつと掴まれたように激しく痛む。

自分の反応に動揺する。

これまでずっと見ないふりをしてきた、胸の奥の騒つき。そして今、それが妙に心地いい不安感に変わり。心臓がやたらうるさく鳴り響いている。

生まれて初めての体の反応に目が回る。

自分でもここまで突き付けられてやっと自覚する。

自分はアヤカに惹かれているのだ。

すぐにユリの顔が浮かぶ。(俺……なにやって……)

混乱して焦る気持ちを知ってか知らずかアヤカはずっと黙って歩いている。

斜め横の顔はいままで見たことないような、辛そうな表情。

「……アヤカ？」

思わず声をかけた。

アヤカは小さな肩に乗せた黒髪をビクツと震わせてゆっくり見上げる。

その黒目がちな瞳が潤んでいた。

なにか、思い悩んでるのだろうか？

それなら自分がなんとかしてやりたい。

何が辛いのか

どうしたいのか全部聞いて全てを叶えたい。

今までよりずっとハッキリした濃い感情が波のように押し寄せる。

俺が、傍にいるから……。

思わずそう言いかけた時、アヤカはゆっくりと口を開いた。

「……いつも、ユウキに甘えてたけど。もう、これからは一人でも、大丈夫だから……」

一言、一言、ゆっくりと。

「心配してくれて、ありがとう」

そう言って微笑むアヤカは息を飲むほどキレイで、体中から沸き

起こる抱き締めたくなる衝動を必死で抑えた。

なんなんだ、これ。

今まで一度も抱いたことの無い荒っぽく甘い感情。ユリちゃんにも感じたことのないという現実が背筋に甘い衝撃が走らせた。

彼女に

触れたい

抱きしめたい

独り占めしたい

理性じゃなく激しい衝動

そして今の自分にはその全てが叶わないことに気付き、切なくて下唇を噛む。

すぐ手の届く所に、愛しい存在がいるのに遠い。

それがこんなにもあまく切ないなんて知らなかった。

生まれたて想いに戸惑いながらその事実には呆然とした。

新しい世界は俺を恍惚とさせ、混乱させた。

俺はそこから一言も口を開くこともなく、

ただ初めて恋した彼女の隣を歩き続けることしか出来なかったんだ……。

始まりと終わりの予感（前書き）

ユリ目線

始まりと終わりの予感

教室、廊下、至るところで彼の目は彼女を追っている。どこまでも、どんな時も。優しく愛しく切なく。

私にはわかる。きっと今の彼の瞳の色は私と一緒に。

ただ、その瞳がこつちを向いていないことが恐ろしく悲しい。

愉しくもないのに何度も何度も朝の光景を反芻する。

今朝、二人の姿を見た私は、何も始まってないのに何もかもが終わるような気がした。

ホームルーム中の教室の1日終わる独特の雰囲気の中、窓ガラスの向こうをみると朝とは打って変わったどんよりと垂れ下がった雲。今にも降りだしそうなその天気は、あまりにも私の気持ちに似ていて、笑えない。

昨日までは晴れてたのに……。

昨日までは良かった。

小さなケンカはあったけど、私のことを一生懸命理解しようとしてくれてる。そんな温かさが彼の手から伝わってきた。

(あつという間に夢が覚めていく……)

彼の手を取って、みっともなくとも大声をあげて私のものと割って入ってもよかった。ただ、そうするにはあまりにも二人の姿は自然過ぎた。

二人の関係がどんなものか、これからどんな風が変わっていくのか、私にはわからないし知りたくもない。

ただ、私の知っていた彼は昨日までの彼で、今日からの彼ではないんだ。

今の私は身も心も疲れてる。担任のダラダラとしたホームルームもやっともうすぐ終わりそう。

すごく間抜けな1日だったな……。

今日私はクラスの違う彼に会いに行った。でも一言も声をかけることも出来なかった。彼は隣のクラスの彼女をひたすら、ただ流れ落ちる想いをそのままに見つめ続けていた。

甘い甘い空気を纏い見つめる彼の姿。私はそんな彼を知らない。見たこともない程深刻で、それでいて幸せを噛み締めるようなあの瞳。

彼の恋するもの独特の雰囲気息をのんで、私はただただ胸に刻み付けるように見つめていたんだ。

雨が窓を叩く音がしてきた。大粒の雨がどんどん窓ガラスを濡らしていく。

空は真っ暗。

まるで私の心と体ごと黒く濡らしていくような大雨。

今日は部活休みになりそう……。

そのことが益々私の気持ち重くさせる。ホームルームの終わりが告げられる。もう少ししたら、彼が私を迎えにくるだろう。

律儀な人だから。

まったく弾まない胸。それよりも彼に会うのがこわかった。私を見る暗く陰った瞳を見たくない。

私は誰よりも早く立ち上がり、教室から駆け出した。

早く早く。

これから始まるであろう、終わりの予感から逃げるように。

私は他のどんな時よりも早く教室から、大好きだった彼から逃げ出した。

初めての恋(前書き)

ユウキの初恋

初めての恋

朝、けだるげな空気の中、同じ制服の生徒達が行き交う、いつも通り慣れた学校への道。

慌てて走っていたり、一人黙々と歩いていたたり、二人だったり三人だったり、自転車だったり。

そんなありふれた朝の登校風景の中、俺はアヤカに恋をした。

ずっと自分は恋愛に向いてないと思っていた。

四つ上の兄は大学三年で、社交的なさっぱりとした顔立ち。昔から愛想がいいから二割り増しには男前に見えて、同級生から下級生、近所のおばちゃんにまでよくもてた。

年が少し離れているから余り一緒に遊んだ記憶はないけど、いつも兄と比べられていた。

自分でも背は高いけど、部活焼けで年中黒い少し濃すぎる顔は間違っても爽やかだとは思えない。

何しろ赤面症であがり症。小学校の時にサッカーを始めて、やっとスポーツ中は声をだせるようになったけど、人見知りはまだ治らない。

初対面の、特に女子とは何を話したらいいかわからず、気まずさから顔が赤くなってます話す話せなくなってしまふ。こんな風だから、毎年クラスメイトとも三学期にやっと話せるようになってクラス替え。という感じになっている。

緊張しないで話せる異性は、アヤカ、従妹の小学校三年生のミカちゃん、アヤカのお母さんのサキおばさんくらいだ。

そんな自分が、どうして有川 ユリと付き合うことを決めたのか……曖昧な感情ではなかったか。

ずっとどこか他人事のような感じがしていた。

なにかとんでもない、後戻り出来ないことをしでかしてしまった子供のような、そんな苦い気持ち胸に広がる。

サッカー部のマネージャーをしているユリちゃんとは最近やっと話すようになったばかりで、彼女のことはよく知らなかった。

ただ、半年くらいまえからタカヤやチームメイト、もう一人のマネージャーの女子からもユリちゃんが自分を好きだと聞かされてた。まさか、と思いつつも、自分を好きな子がいる。そう言われることは自分をとても良い気分させた。

ユリちゃんはよく働いてくれて感じのいい子だったし、見た目も清楚で好感が持てた。

ただ……あの日の突然の告白にすぐ付き合おうと返事したのは、前の日、酔っ払った兄に幼なじみと近所のおばさんくらいしか女気がないと
からかわれたせいではないと言い切れるだろうか。

「ユウキも彼女の一人くらい連れてきてみるよ」

そう言われたのは初めてではなかったけど、やっぱり多少の悔しさがあったのかもしれない。

きっかけはどうあれ、ユリちゃんと付き合うことを決めた。

多少の違和感を感じながらも、出来る限り大切にしなければと本当に思っていた。

この気持ちに気付く今日までは……。

どう表現したらいいかわからない。

ただ、もう昨日までとは確かに違う感情が自分の中にあつて、抑えようと思っても突然暴れ狂ったように外へ出たいと出口を探す。

気付けば全身でアヤカを探してる。

隣のクラスのアヤカの笑い声だけが昨日よりスピーカーをつけたようにはっきりと聞こえる。

アヤカが今誰かに声をかけられ、いつ呼び出されてるか…そう思うと焦って気持ちが落ち着かない。

今、自分は廊下においてアヤカの姿を目で追っている。無意識に近寄る奴ら全てに嫉妬する。

廊下が暗くなった気がして窓の外を見る。大きな雨雲が見える。

もしかしたら、今日は部活が休みになるかもしれない……。

ユリちゃんの顔が浮かぶ。

それでも、不器用な自分が、この気持ちを隠して今まで通り付き合うことは出来ない。

俺って最低だな。

小さく息を吐く。

言うなら早い方がいい。

こんな自分に告白してくれた相手を、出来るだけ傷つけない。

恋をした……。

それだけことが、こんなにも心を甘くし、苦しく締め付けて、そのこと以外考えられなくしてしまうなんて知らなかったのだ。

もうすぐホームルームを始めるために担任がやってくるだろう。

恋する人の姿と声に後ろ髪を引かれながら、教室へと入る。

初めての気持ちの激しい浮き沈みに甘く、息苦しい疲労感を感じつつ、ゆっくりと席に着く。

雨が窓を叩き始めた。

二人の幼なじみ〜ヒロキ〜（前書き）

アヤカと二人の長い一日

>アヤカ目線<

二人の幼なじみ〜ヒロキ〜

幼いころ、私とユウキの家族同士で集まった時、一人っ子の私はいつも二人の後をついて回っていた。

ユウキと、ユウキのお兄ちゃんのヒロキくんの。

ヒロくんは四つ上で小さな頃はとても大人に感じた。

その頃のユウキは、小学校三年生まで私より背が低かったし、赤ちゃんの頃からオモチャやお菓子の取り合いなんかは日常茶飯事で、親友であり、よきライバル。時には弟のような感じだった。ユウキはそう言うとき怒ったけど。

私達の手の届かないものを簡単に手に入れたり、難しいパズルやゲームもすいすい解いて、大人のような言葉を使って話すヒロくんは、私にとって兄以上の憧れの存在だった。

ヒロくんが中学に入ってから、集まりの時にもあまり顔を出さなくなつて疎遠になつていったけど。

多分、ヒロくんは私の初恋の人。

急にヒロくんが離れていって、寂しくなつた私を元気づけてくれたのはユウキだった。元気がない時はいつもお菓子を分けてくれたり冗談を言つて笑わせてくれた。

近所のワルガキが私をからかいに来たら、棒切れを振って守ってくれたし、危ない道を通る時には手を貸してくれた。

ヒロくんみたいに、ヒロくん以上にすごく頼もしく思えたんだ。

目の前には幼い私とユウキとヒロくんの三人がファインダー越し

に並んで笑う姿がある。ふと、リビングの写真立てを見つめながら、懐かしい頃を思い返していた。

(そろそろキッチンに手伝いに行こう)

今日はうちのお母さんの誕生日会ということで、久しぶりに家族でユウキの家に来ていた。

ユウキのお母さん「ルミおばさん」から、今日ユウキはサッカーの練習試合で帰りは遅いらしいと聞いていた。

すぐに会わないで済むことに少しほっとしてる。

それが本音だった。

新しい関係を作っていくと心に決めただけ、

こればかりは一人でどうこう出来るものじゃない。まだ一緒に登校した日から何日も経ってはいなかったし、あれからほとんどユウキと話す機会はなかった。

姿は見かけるんだけど。最近、なんとなく視線を感じるとその先にユウキがいることが何度かあった。

目が合うと、ゆっくり逸らされる。何か言いたげな……その空気。あの視線。

キッチンに行くと「Saki's Birthday」とでかかか書かれたバスデーケーキが用意されていた。

クリームはピンクでたくさんの花やハートのクッキーで飾られている。ラブリーなケーキ。ルミおばさんは可愛いものが大好きだ。

ピンク地に水色の水玉のエプロンでせつせとメインディッシュを作っている。

色とりどりのオードブルはもう完成していた。

「ルミおばさん、何か手伝う？」

声をかけると優しい微笑みを返される。相変わらず若い、美人だ。ユウキにそっくりな目元。

「ありがとう。じゃあオードブルと飲み物もっていつてくれる？アヤカちゃんも気が利いて助かるわ。それに比べてうちの男共は、二人もいるのに役に立たないっいたら……」

女の子が欲しかった。というのが口癖のルミおばさんはいつも私を可愛がってくれる。たまに母と三人でショッピングに行ったり。二人でお茶することもある。

いつものぼやきに私が苦笑していると、

「役立たずの息子もお手伝いしましょうか？」

冗談めいた口調の言葉が私の頭の上から降ってきた。(わっ！) ユウキかと驚く。見上げるとヒロくんだった。

「久しぶり。」

悪戯っぽい二つの茶色の目がニヤリと笑う。ユウキとそっくりな声と雰囲気のにてる目。でももう少しシャープな顔立ち。

「あらめずらしい。課題終わったの？ 手が空いたなら、ヒロキも手伝って」

「喜んで」

手慣れたウェイターのように次々と料理を運ぶヒロくんの後を追って手伝う。

「メインディッシュのローストビーフが焼けるまでまだ少しかかるから、二人で遊んで」

懐かしいセリフに背中を押され、準備を手伝った後、飲み物を持つてもものすごく久しぶりに二階のヒロくんの部屋に入る。

ダークトーンの家具。まだ新しいデスクトップのパソコンにはスイッチが入っていて、時々文字が映ってる。本棚から溢れるように積み重ねる難しそうな本。

「課題仕上げるから少し座って待ってて。すぐ終わるから」
少し迷ってベッドにもたれるように座った。持ってきたミルクテイを飲みながらパソコンに向かうヒロくんを盗み見る。

無造作にタバコに火をつけて画面を見つめながら慣れた手つきでキーボードを叩く。真面目な顔していると本当に格好いいと思う。さすが、小さな頃からもてまくっただけある。

「何見惚れてるの？そんなに俺格好いい？」

ぼんやり見つめると目が合ってからかわれた。

真っ赤になるのがわかる。

「み……見惚れてないよ！自分で格好いいとかいわないで」

本当のことだもん。としれっと答えるヒロくん。

ああ、そうだ。こうゆう人だった。私は久しぶりのやりとりに懐かしさを感じていた。

いつも自信と余裕たっぷり……それでいて繊細さが見え隠れしてるアンバランスな感じ。つまり憎めないタイプ。

「俺は正直なんだよ。」

「コーヒーを口に運びながらさらっと一言。」

「ああ、でもアヤカは不器用な方が好きなんだっけ？」

一瞬何を言ってるのか分からず、意地悪そうに微笑むヒロくんを見つめ返す。

「不器用な弟は今日帰りが遅いつて言っただけど……」

そこまで言われてやっと気付く。今度は首まで赤くなったのがわかった。

「な……何言っつて」

「ごまかそうとすると余計に頬が熱くなる。

「不器用な男って意外にもてるからな……俺からみたらユウキは不器用っていうより、鈍くて捻くれてるって感じだけど。……そこが いいのかな？」

散々な言い様。でもちゃんと愛情を感じる。なんだかんだ言っ
て弟が好きなのだ。

まあこんな分かりづらいんじゃないかユウキは気付かないだろうけど
……。

自分の気持ちをあっさり当てられて、気持ちが緩んで口が開く。

「でも……ユウキには彼女がいるし……」
言葉にすると重く苦しい事実。

「……ふーん。そうなんだ。最近なんとなく感じてたのはそれかな
……。
連れて来たことも話聞いたこともないけどね」

気付いてたんだ。

締め付けられるような胸の痛みから目を逸らしながら、連れて来
てないと言っことに安心した。そんな自分が嫌になる。

「まあ、出来てもあいつは簡単に言わないだろうけどね……。でも
付き合ったのってごく最近だろ？」

そろそろ1ヶ月程になるはずだ。そう答えると意外そうな顔をさ
れた。

「俺はここ数日だと思ってた。」

「なんで？」

「ここ最近あいつから雄の匂いがするからさ」と意味深に笑う。

「雄の匂い？」

「雄が雌を狙う。動物としては当たり前。本能だろ？」

分からない。恋愛って意味だろうか？

難しい言葉にそれとは違う空気を感じる。ヒロくんの顔がぐっと近づく。

「無意識に雌も雄を求める。だから雄は応えるんだよ」

訳が分からなくて心臓が高ぶる。頭が熱くなって呼吸が苦しくなる。

なんの事を言ってるんだろう。ただの恋愛話じゃないんだろうか。

アヤカは子供だね

エミによくからかうように言われる。それと同じこと？

混乱していると、

「アヤカにはまだ分かんないかお子ちゃまだもんな」 小馬鹿にしたように言われる（やつぱり！）

凶星を当てられカツとなって咄嗟に言い返す。

「確かにヒロくんよりは全然子供だけどっ……」

言葉に詰まってしまう私を笑いながら茶色の瞳が更に近づく。

「可愛いな、アヤカ。なんなら俺と試してみる？」

耳元で囁かれた言葉が体の中を通して背筋がゾクツとする。慣れない感覚と言葉に目眩がした。

軽い冗談にそんな風に反応した事が恥ずかしくて悔しくて腹が立つ。

赤い顔のまま言い返そうと口を開いた時
頭の上から硬い声が響いた。

「なにやってんだよ……兄貴」

振り返ると部活帰り姿のユウキがドアの向こう側に立っていた……。

二人の幼なじみ〜ユウキ〜（前書き）

二人の幼なじみ〜ヒロキ〜のつづきです。

二人の幼なじみユウキ

「……アヤカに何してんだよ……」

ピリピリとした空気。

気が付けば私の数センチ先にヒロくんの顔があった。誤解され兼ねない状況に改めて気付いて反射的にヒロくんから離れる。

「ユウキ……？」

恐る恐る声をかける。

ヒロくんを睨んでいるユウキは今まで見たこと無い程恐い顔をしていて知らない男の人のように感じた。

「意外に早かったなユウキ。そんな顔すんなよ。アヤカが恐がつてるぜ」

とくに否定も説明もせず、そんな状況でも軽口を叩くヒロくんの態度にますます気持ちが焦る。

「ち……違うの。ただ、私ヒロくんにからかわれて……」

「からかった訳じゃないよ。アヤカは可愛いし、俺今彼女いないしね」

そう言っって肩に手を回される。

信じられない！

私の気持ちを知っていて、この状況を煽るような言動をするヒロくんの真意がわからず、ただ食い入るように彼の顔を見つめる。

その間に手が伸びてきてヒロくんの肩を掴んだ。

「……アヤカに触るな」
低く唸るような声。

静かに、でも有無を言わせぬ勢いでユウキの腕が私の腰に回る。
瞬間、抱きしめられるような形になる。汗の乾いた匂い。回された腕の熱さに心臓が跳ね上がる。

気が付けば部屋の外に出されていた。

腕は一瞬で振りほどかれて、添えられた背中の手もすぐに離される。

ただ熱い余韻だけが身体に残る。

そっとユウキを見る。

「じゅめん……」

さっきまでとは別人のように、恥ずかしげに目をそらすユウキ。
いつものユウキだ。

「準備できたわよ。みんな降りてらっしゃい」
そんな雰囲気掻き消すように、日常的な声が一階から響く。

「あつ、今いきまーす」
何事もなかったように、慌ててそれに答える。
振り返るとユウキは無言で自室へ入っていく所だった。

気まづくも全員が揃って誕生日パーティーははじまり、大人たちは様々な話に花を咲かす。

私たちの雰囲気も、

「何？あんた達ケンカでもしたの？」
という一言で終わった。大人たちの鈍さもこんな時はありがたい。

ユウキは無口で黙々と食べるだけ。

ヒロくんはまったく何もなかったような態度。でも二人は一度も口をきかない……。

席も二人に挟まれていて、なんだか変に気疲れしてしまった。

食事の後は大人たちはお酒も入り、まだ続いている宴の中一人先に帰る事にした。

外はもう真っ暗だったけど、煮物の冷めぬ距離というくらい近い道のり。

気にせず玄関を出ると後ろから声をかけられた。

「アヤカ」

振り返るとユウキがいた。とたんに落ち着かなくなる心臓。

「……送ってく」

「近いし大丈夫だよ」

「……大丈夫じゃないよ。もう暗いし」

断る私に構わず並ぶユウキ。

「今まで送ってくれた事なんてあったっけ？」

「……なかったかもな」

過去数回あったかなかったかだと思っ。親に言われたとか。そんな感じでもない今日、なんだか緊張してうまく話せない。

話題を探しながら黙って歩くともう我が家が見えてきた。本当に近いのだ。

お礼と別れの言葉を言おうと見上げると目が合う。

「……さっきは、ごめんな」

食事前の出来事を一気に思い出して、思わず顔が熱くなる。そういえばさっきも謝っていた。

「……なんで謝るの？」

思ったことを口にする。今日はヒロくんもユウキも少し変わった。突然のことばかりで私の頭も心も付いていけない。

私の知らない所で幼なじみの『男の子』達は私の知らない『男の人』に変化しているのだろうか。

最近のユウキの顔は、知っているのに見馴れない、どこか大人びた雰囲気。

もしかして、これがヒロくんの言った雄の匂いのことかな…

同時にヒロくんの近づく顔を思い出してなんとなく気ますぐなりユウキから視線を外す。

「兄貴と何話してたの？」

心を読まれたようで、ユウキの顔を見ることが出来ず口籠もる。

(言えない……)

思えばユウキのことばかり話していた。ヒロくんにかかわれた事を思い出して赤面する。

「べつに……特に何も……」

もっとうまい言葉があるはずなのに、出てこない。今日は色々あ

りすぎて自分の許容範囲を超えてしまっている。
私は呼吸を整えるだけで精一杯。

「アヤカ……小さい時、兄貴の事好きだっただろ？」

「え……？」

知ってたの……？

初恋を言い当てられて動揺してしまう。

気付かれてるとは思わなかった。恥ずかしくて目を泳がせながら
ユウキの顔を見た。

「……まだ好きなのか？」

空気は動くんだ。

生き物のように。

そう感じた。

ユウキの周りが熱くなり冷たくなり暗くなり濃くなる。

今日一日でこんなにも目まぐるしく変わる彼を初めて見た。

そして今ハッキリと思う。もう彼は私の知っている男の子ではな
い。いつのまにか決定的な何かが変わってしまったんだ。

まるで知らない人みたい。

「……違うよ」

ユウキの雰囲気には圧されて自分でも思ったより小さな声で答える。

「さつきはヒロくんも冗談で絡んできてただけだし……」

「冗談じゃないと思うけど……」

口の端を上げて、笑っているけど笑っていない。怒ってるように
見える。

びっくりして黙って見上げてると、

「アヤカは隙がありすぎだよ」

前を向いたまま呟く。

「……もつと男に警戒した方がいい」

似たような事をエミにもたまに言われるけど……。
自分ではよく分からない。そんなに誰にでも気を許してるつもりもない。

腑に落ちない気持ちで聞き返す。

「男って……ユウキにも？」

そんな私を真っ直ぐ見つめてユウキが答える。

「……まあね」

月明かりのせいだろうか、ユウキの表情がすごく艶っぽく見えて、胸の奥に甘くて苦いものが広がる。

「ユリちゃんがいるくせに……」

こんな正直な気持ちを吐き出せる程、今夜の空気に特別なものを感じた。

「……別れようと思ってる」

突然だったそのセリフも違和感がないくらい。

「……ユリちゃんには、今度ちゃんと言う」

見慣れない男の人の中に私の知ってる彼が覗いてる。その真っ直ぐな瞳。

照れ屋で不器用だけど嘘のない。私の大好きな。

今はなんて言えばいいかわからない。

彼の中で何が起こっているのかも。

私はその時、初めて出会った相手にそうするように、ただ目の前

にいる彼をそのまま受け止めることしか出来なかった。

おやすみ、また明日。

そう言って帰っていく彼の背中を見送る。

私は彼の何を見てたんだろう。何を知っていて、何を好きだったんだろう。

私の心は混乱していて、今日はとても疲れていて、今夜は思考を止めて眠ろうと思った。

おやすみ、また明日。

小さく見える彼の背中に私もそう呟いた。

嫉妬（前書き）

アヤカの周りの変化

> エリ目線 <

嫉妬

想像は出来た。

最近のアヤカは女の私から見ても時々ドキツとする程艶っぽい表情をする。

アヤカの中の眠っていた色香が恋の喜びや痛みで濃い匂いを発しているんだろう。

もちろん本人は気付かない。この手の香りは特定の人間にしか届かないものだから。

アヤカに好意を持っているか……または真逆の感情を持っている人間。

後者には、さぞかしキツイ匂いに感じるだろうな。

いつも通りに委員会が終わった後、なぜか三年男子の先輩から突然声をかけられた。

「新藤さんてサッカー部の高森 ユウキと仲良かったよね？」

「はい？」

「あいつ、彼女と別れたのって本当？」

まだ私が知って間もないというのに、もうそんな情報が回っていることに驚いた。

「えっそうなの？ エミちゃん本当？ あの二人仲良かったのにな、早くない？」

隣にいた他のクラスの女子も話題に飛び付く。

「そしてみたいけど……」

詳しく聞きたそうな相手を適当にかわして教室を後にする。

ユリちゃんとユウキくんが別れた事は、本人達が思っていた以上

に早く周りに知れ渡っているようだった。

多分、アヤカを狙う男子達と、噂好きな女子達による連携プレーの賜物だろう。

(本人達にとってはいい迷惑だろうな)

もちろん、アヤカにとっても。

ユウキくんがなぜユリちゃんと別れたのか、直接何も聞いていないし詳しいことは何も知らない。

アヤカですら曖昧にしか分からない感じだったし。

ただ、最近のユウキくんは明らかに雰囲気が変わった。前はただ不器用で照れ屋な男の子って感じだったけど、その不器用さや照れた感じが一点に絞られるように、熱く、濃い。そんな視線や空気を放っていた。

女の子達はそういう変化に敏感。ユウキくんに注目する女子も増えていたみたいだし。

そこへ別れ話。広がらない訳はない。

(だから、想像は出来たんだ)

数日前、朝アヤカは体育館シューズを履いて登校してきた。

「上履き、どうしたの？」 私の問い掛けに、不安に陰る顔に無理に笑顔を作りながら、

「なんか、下駄箱に無くて……どこいったんだらう？」

と不思議そうに困った顔で笑っていたアヤカ。

この前は授業の直前で体育を休んだ。

アヤカは貧血持ちだからたまに体育を休んだりする。でも、その日は元気で体調も良さそうに見えた。

「どうしたの？ 気持ち悪い？」

小さく首を振る。少し様子がおかしい。

「アヤカ？」

「無いの。朝は確かに持ってきたんだけど、今持って行くつもりで見たら、無い……」

途方に暮れたような声。

「体操服が？」

その問いにアヤカは戸惑うように、力なく頷いた。

探す時間もなく、とりあえずその日の授業は休んだけど、掃除の時間にアヤカの体操服は思いがけないところから出てきた。

「住谷さんのじゃない？」

クラスの男子が見つけた場所は、ゴミ箱。ご丁寧に全部出されて汚されてる。

その時のアヤカの顔色は真っ青で、倒れるかと思った……。

間違っただけのような場所じゃない。誰かが意図的に捨てたんだ。シヨックに強張るアヤカを見ていられず、私は怒りが込み上げた。

「誰！？ こんなことするのっ」

犯人探しをしようとする私を止めたのはアヤカ。

「……いいよエミ……。理由はわからないけど。なにか誤解があるのかも知れないし、相手もわからないし……。」

少し様子をみよう。

青ざめながら、冷静でいられるアヤカに驚いていると、

「私は大丈夫。エミがついてるもん」

「アヤカ……」

アヤカの無理に作った笑顔が胸に痛くて、思わずそっと肩を抱き寄せた。

「何かあったら私に必ずいつてね」

私の真剣な言葉に

うん……心配してくれて、ありがとう。
安心したようにアヤカは微笑んだ。

下駄箱には頻繁に何か書かれた紙が入ってるみたいだった。アヤカは私にはつきりとは言わなかったけど。

これ以上なにかあったら先生に言って、委員会でも取り上げてもらおう。

そう思っていた。

疲弊してる憂いのせいか、

「アヤカちゃん、なんか綺麗になったね」

と男女問わずそう噂される程、いつも以上に綺麗に見えるアヤカ。

すこし落ち着いたけど、放課後やお昼休みにまだたまに来る

「住谷 アヤカちゃんいますか？」

という訪問や呼び出しも、

「何か用ですか？」

とまずは私が確認するようになっていた。

だいたいその時点で逃げるように去っていく男子が多い。覗いていく女子にもチェックを入れてる私を、

エミは最強のボディガードだね。

とアヤカは笑って言うけど。

明らかにユウキくんが別れた後からだから、犯人は何となく目星はついていただけ、アヤカに嫉妬している女子は他にもいて、なかなかはつきりしなかった。

「幼なじみで美男美女なんて出来過ぎてるよね」

そう言われてる事を聞く事は実際多い。

人は自分に無いものを嫉む。

魅力や環境、持って生まれた努力のない立場。

例えば幼なじみ。

私は幼なじみというのは正直不利だと思う。

小さな頃から一緒なら必ず好きになるかといえばそうでもない。逆に近すぎて対象外になりやすいと思う。ユウキくんが今までそうだったように。

それでも妬まれやすいだろう。二人が魅力的なら尚更。

さつき別れたばかりのアヤカの姿を思い出す。

長い緩やかに揺れる黒髪を机に広げながら虚ろに俯せている。一種の異様な色香が漂っていた。

私はアヤカに惹かれる男子の気持ちが分かる……。

あの、何かを見透かすような澄んだまっすぐな黒い瞳。あの瞳に見つめられると、時々どうしたらいいか解らずに目を逸らしたくなってしまう事がある。

思わず赤くなってしまうたり、気まづくなったり、嘘がつけなくなる。

そしてアヤカが微笑むと温かく優しい気持ちになった。花を愛しむ気持ちに似てるなと私はいつも思う。

その反面、

同じ女子としてアヤカに嫉妬する気持ちも理解できた。

アヤカに贖えない魅力を感じつつそれを認めたくない女心。

私の中の味方でいながら、
相手を完全に憎みきれない自分がいたのも事実。

数日後

私はそんな自分を責めることになる。

だんだんエスカレートしていくだろう嫌がらせ。予測すること
は難しくなかったはずなのに……。

まさか、あんな事が起きるとは思いも寄らなかったから……。

最後の帰り道（前書き）

ユリとユウキ

二人の終わりの日

> ユリ目線 <

最後の帰り道

「……ごめんユリちゃん……ごめん……」

涙でなにもかもが歪む。

(覚悟はしていたけど……)

同じ部活で逃げ回るのにも限界がある。

あの予感があった雨の日から数日後、私はあっけなくユウキくん
に捕まってしまった。

「一緒に帰ってくれないかな？」

部活が終わり、部員達もマネージャーもほとんど帰ってからマネ
ージャー室を出た所で声をかけられた。何日か無理やり理由を作
って一緒に帰らないようにしていた……無駄な先送りも虚しく。も
う断るネタも尽きてしまった。

無言で目を合わさず頷く。

初めて手を繋いだ日からまだ数週間しかたっていないのに。

宙をさまよう私の手の平は虚しく夜風を握り締める。

私はいつもよりずっと早足で歩いて、ユウキくんは少し後をつい
てきている。

ずっと無言だった。

早くこの沈黙が終わって欲しくて、でも口を開いて欲しくなくて、
ひたすら早足で歩いてきた。

そのことになんの意味もないのは分かっていたけど、そうせずつに
はいられなかった。

足を止めるのが怖い。
目が合うのが怖い。
終わりの予感の全てが……。

家が見えてきた。

「じゃあ、またね」

顔も見ないで走り去る私の腕をユウキくんに取りられる。

「待って！」

驚いて体中が彼の声に反応する。

今日初めてまともな目が合った。その辛そうな顔に、胸を突かれて俯く。腕を捕まれたまま向かい合う。

どうみても楽しい話をされる雰囲気ではない。全身で彼の話を拒否してしまう。

「……ユリちゃんに、話さないといけないことがあるんだ」
捕われた腕から伝わる手の平の温かさを感じる。その全てが切ない。

ユウキくんはそんな私の心を知ってか知らずか、
苦しげに話し始めた。

「聞きたくない」

間髪入れずに答える私の態度に一度驚いたように息をのんでから続ける。

「……ユリちゃん。聞いて」

「嫌……！」

愛しい手を振り払い耳を塞いぐ。思ったより大きな声が出て自分でも驚いた。

ユウキくんはそんな私を見るのは初めてだろう。彼はまだ、私の事を何も知らない。何も知らずに終わっていくんだ……。フライング気味に涙が溢れた。

「……俺……」

「聞きたくないってば!!」
耳を塞いだまましゃがむ。

「……ごめんユリちゃん。……もう……ユリちゃんとは付き合えない……」
残酷な一言はしゃがんでいる私の目の前から聞こえた。瞳を開けると、同じようにしゃがんでるユウキくんがいる。

その姿に更に切なくなる。涙が止まらない。

「……私と別れて、住谷さんと付き合うの?」

思った以上に強く責める口調。涙声なのが余計に哀れに耳に響く。

「……アヤカは関係ないよ……俺が勝手に好きだけだから」

驚いて答える彼が本気で言ってるのが分かる。どこまで鈍いんだろっ……ここまでくると呆れてしまう。

「……最初に聞いた時、ただの幼なじみだって言ったじゃない……」
勢いに任せて気持ちを吐き出す。

「……あの時は本当にそう思ってたんだ……」
返ってきた答えは余りにも想像通りのセリフだった。

辛そうに一言一言痛みを堪えるように答える彼に嘘や誤魔化しを感じなくて苛立つ。

苛立ちながら愛しくなつて次から次へと涙がこぼれる。

手を伸ばす。

勇気を出して座る彼の手を握った。私の手も心も震えている。

「……住谷さんを想っていてもいい……」

瞳を見つめて、想いを込めて伝える。

「……私じゃ、どうしても、ダメ?」

その手は握り返されることはなく、彼の瞳は痛々しく、苦痛に歪められた顔は逸らされる。

「……ごめんユリちゃん……ごめん……」

目の前が真っ暗になる。

恋の成就が全てを色づかせるものなら、拒絶されることは全ての色を無くす事だと体感した。

目の前の彼を失うという絶望感、虚しく木偶の坊のように乗せた行き場のなくなつた手の平と固く冷えた想い。それが憤りになり、怒りの矛先が「彼女」に変わる。

私は居たたまれなさに立ち上がり走りだす。

(ずっと好きだったのに……付き合えて本当に嬉しかったのに……。 「アヤカ」に比べれば短いかもしれないけど……)

流れる涙もそのままに家へと駆け込む。

誰にも会うことなく自分の部屋の扉を閉めきつた。

遂げられた想いを夢見る間もなくあっけなく断ち切られた。

住谷さんと何かあったんだ。……あんなにモテてるのに、なんでユウキくんまで奪うの!?

(彼女が曖昧な態度で彼を誑かしたんだ)

幼なじみという曖昧な特権が急に憎らしくなる。

いつでも見え隠れしていた「アヤカ」は私にとっては脅威だった。

それでも一度は彼は私を選んだ。

その事実だけが私のなけなしの自信を支えていた。

そしてついさっき、その自信はあっさりと崩れ落ちた。

覚悟はしてた……でも、彼を失う現実は思った以上に私の心を不安定にした。

胸の中に次々と生まれる黒々と渦巻く気持ち。

住谷 アヤカという存在が、色を変え形を変えて何度も何度も襲い掛かってくる。暗い部屋の中、しゃくり上げる自分の声だけが滑稽に響いた。

彼女さえいなければ……。

私は、真つ暗な暗闇の中。

この悲しみの元凶を全て彼女に向けることで
這いつくばった自分の心を光へと導こうともがいていた。

誤解と中傷（前書き）

自分への嫌がらせ

>アヤカ目線<

誤解と中傷

ああ、また……。

手に当たる紙の感触。気が重くなる。

手紙というか中傷や嫌がらせ（としか思えない）内容。

私は、ここの所頻繁に靴箱や机やロッカーに入っている

『人の男を取るな』とか『色気を振りまいて気持ち悪い』とか『あなたのせいで振られました』とか書かれてる紙を無闇に捨てる事も出来ず、

滅入る気持ちと一緒に鞆の奥にしまい込む。

この間無くなった上履きも、トイレのゴミ箱に入ってたし……。思わず溜め息が漏れる。

誰の仕業であれ、誤解だとしか言えない。

中傷の手紙と一緒にたまに入っている知らない男子からの手紙。

好意も嫌悪も私のいない場所、知らない所で空回りしているように感じる。

ただこの間、体操服を汚されてゴミ箱に入れられてた時はショックだった……。

無言の強い悪意をはつきりと感じたから。

見えないものは怖い。

私の周りの誰か……。わからないから余計に。

これ以上誤解を招きたくなくて、私は無意識に男子との接触を避けていた。

アヤカがモテるから、妬んでるのよ。

エミはそう呆れながらに言っていたっけ。

考えてもどうすればいいかわからず、また溜め息を漏らす。教室に入り、机の上と中を確認する。

この間はノートに落書きがされてた。

消えない油性ペン。

『略奪反対』とか『フェロモン女』とか『色目光線キモい』とか…

…。

重くなる気持ちと同時にエミの言葉を思い出した。「小学生か！」

後ろからノートを覗き込んだエミが突っ込みを入れたんだ。あの時は思わず吹き出してしまった。

「おはよー、アヤカ。何辛気臭い顔してんの？」

「……エミ。おはよう。」 エミに声をかけられてほっと息を吐く。知らないうちに緊張で体を固くしてたんだな……と今更気付いた。

私に起きていることに薄ら気付き始めている他のクラスメイト達は不自然な態度で見つめ振りをしてるけど、

エミは変わらない。

一人でも味方がいると言う事は本当に心強かった。

『色目女』でもない『男好き』でもない私を知ってる人がいる…

…。

今までの日常では考えられなかったそんな当たり前なことが、今はとても大切だった。

しつかり前を向き続ける為に。私は疾しいことなんて何一つしてない。

「最近はいタズラ少なくなったね」

「そう、だね」

「……まだ手紙はあるんだ？」

歯切れの悪い返事から見透かされる。エミには適わない。

「……うん。でも少し減ったかも」

余計な心配かけたくなくて平気そうに笑ってみせるけど

私の下手な小細工なんてすぐバレてしまう。

「無理しない」

「ぺちんっとおでこを叩かれる。」

「あいたっ」

良い音の割に優しい手加減。

「何でも言ってよ？」

切れ長の目が心配そうに睨んでる。学級委員長なんてやるくらいアネゴ肌で人気者なエミ。つつい頼りたくなるけど、余り迷惑はかけたくない。

結局、自分の問題なんだから……。

最近確かに教室内の嫌がらせはほとんどなくなった。でも……。

「……あの子じゃない？」

「三年にまで色目使ってる……」「えーあの子？ ……大したことないじゃない」

「くんも振ったらしいよ」

「ちやほやされて調子に乗ってる……」

教室移動や日直の準備で三年生の廊下を通る時や全体朝礼がある

時とかに

度々聞こえてくる三年女子の耳に入る程大きな声で言われる陰口。
(あんな大声だったら陰口じゃないか……)

手紙はその三年生からも来てるんだろう。

エミも気付いて。気にすることないよってフォローしてくれたけど……。

昼休み。エミがお弁当をもって私の席まで来る。

「アヤカ、ご飯食べよ〜」 言われてお昼のことを思い出す。

「あ！今日お弁当無いんだった。購買いかなきゃ」

「なにそれ〜」

「ゴメン。忘れてた！ 遅かったら先食べてね」

両手をあわせて謝る。

口を尖らせながら「了〜解」と席につくエミを後にして慌てて購買へ向かう。

最近ずっとお弁当だったしなんだか色々あつて寝不足でうっかりしてた。

うちの高校の購買のパンは結構美味しくて早くいかないとすぐ売り切れてしまう。(すごく並ぶし、急がないと)

焦る気持ちで早足になりながら階段を降りていくと

「……また男子から呼び出しでもあつたんじゃない？」

「モテモテな人は大変よね〜」

クスクス笑う声が聞こえた。

踊り場で見たことのある三年女子が何人かいることに気付く。

いつも陰口を言ってる先輩だ……。

胸の中に嫌な感じが広がる。

目を合わせないように足早に通り過ぎようと俯いた時、
下からユウキが上がってくるのに気付いた。

思わず足が止まる。

「また色気光線？」

「やだー」

笑いながらわざとらしく背中にぶつかられる。

「あ、ごめんね」

体がグラリと揺れる。

足元がふらつく。

あ……。

軽い目眩。……やばい。こんな時に……。

重力に逆らうことなく崩れ落ちる足元。

足場を失った私の体は踊り場から下へと転がり落ちていった……。

キミの痛みボクの想い（前書き）

いとしいキミに想いよ届け

>ユウキ目線<

キミの痛みボクの想い

その瞬間信じられない事が目の前で起きた。

バランスを崩すように、階段の上から落ちてくるアヤカ。咄嗟に駆け上がり彼女の体を受け止める。

血の気の引く思い。

重力の勢いに押され、アヤカを抱き留めたまま一番下まで何段か滑り落ちる。

ドンドンと鈍い痛みが背中に響く。なんとか受け身が取れたようで頭は余り強く打たずに済んだ。

「いてっ……」
思わず漏れた声につむっていた目を開けるアヤカ。「なんで何が起きたのかわからない様子。」

まじまじと顔を見て、ゆっくり状況を理解していく。真っ青な顔。「ユウキ……！ ごめん、大丈夫？ 大丈夫!？」

心配するアヤカに怪我もないようでホッと一息つきながら腕から離す。

「俺は鍛えてるから大丈夫だよ。アヤカは？ 怪我ない？」

「私は、大丈夫……」

悔しそうに悲しそうに俯く。

「ありがとう……ごめんね」

最後は消え入りそうな震える声。まだ少し顔色が悪くみえる。

何人が野次馬が集まってくる。

上にいた三年らしき女子達はすでにいなくなっていた。

落ちてくる瞬間、確かに誰かアヤカにぶつかっていた。

「ユウキ、保健室行こう」 大丈夫だと言っても信じられないのか
立ち上がって手を引く。

「アヤカの方が顔色悪いよ」

「私はいつもの貧血だから……」

有無を言わせぬ勢いで手を引いたまま歩きつづけるアヤカ。

こんな時なのに引かれる手が懐かしく。久しぶりに話せた事が嬉
しかった。

「軽い打撲かな。湿布張つとくわね。大丈夫、高森くんはよく鍛え
てるし」

ハハハツと大きな口を開けて笑いながら

保健の白井先生が背中と肩にパシンパシンと湿布をしてくれる。

大袈裟な気がして逆に恥ずかしい。

「住谷さんは、貧血ね。顔色悪いわよ。いつも言うけどしっかり鉄
分取ってね。また階段で目眩が起きたら大変よ。今回は高森くん
に助けてもらえて本当に良かったわね！ 運動神経良くない人だっ
たら一緒に怪我しちゃうとこだったわよ」

これからは足元に気を付けてね。

何も知らない先生はそう言ったただけだったけど。

「本当、これからは気を付なきゃね。今回はユウキがいてくれてラ
ッキーだったな」

保健室から出て渡り廊下を歩く。

急に明るくなり眩しいのか目を細めるアヤカ。まだ少し蒼白い顔が痛々しい。

無理に明るく振る舞ってるように感じて

「偶然じゃないだろ？」　つい強い口調で言う。

「明らかにわざとだったよ」

もし自分が通りかから無かったらと思うとゾッとする。

一瞬にして曇るアヤカの顔。真上に上がった太陽とは正反対の空気が。

気になってた事を口にする。

「他にも何かされてるんだろ？」

黙ったまま目を合わさないアヤカ。

住谷さん嫌がらせされてるらしいよ。

女友達が多いタカヤから昨日聞いた。

アヤカの様子がおかしい事には気付いていた。

いつもと違う少し暗い雰囲気纏って、よく通る笑い声も最近は余り聞こえなかった。

初めは小さな嫌がらせだったのが、今は三年からも目を付けられてるらしい。とタカヤが言っていたのを思い出す。

聞いているだけで胸クソ悪くなる話。

そんなことされてるなんて思いもしなかった。

「最近アヤカちゃん、目立ってたからなあ。三年からもかなり告られてたし。アヤカちゃんが原因で振られた女子の逆恨みって話も聞いたな」

アヤカが原因で？
ちらりとユリちゃんの顔が過る。
聞いたような話に胸に苦いものが広がった。

だからと言ってアヤカを攻撃するのは明らかに逆恨みだ。

誰かを想うことが、誰かを傷つけることだとしても、それをアヤカが望んだわけじゃない。

目の前のアヤカを見つめる。嫌がらせに戸惑い、陰りのある横顔。アヤカのいつもの笑顔が見たい。誰よりもその笑顔を守れる者になりたい。

何よりも、理由なく傷つけられているアヤカを黙って見ていられなかった。

「アヤカ、俺の事避けてなかった？」

「……そんなこと、ない」 アヤカの目が気まずそうに泳いでいる。わかりやすく笑ってしまった。

「相変わらず嘘が下手だな」

真っ赤になって顔を背けるアヤカを単純にかわいいと思う。

「ユウキに言われたくないよ」
ボソツと言われる。

（確かに）

嘘の下手さ加減は人の事を言えない事は自覚している。

アヤカに避けられていた事には気付いていた。

自分の気持ちに気付いてから、こんな風に向かい合うのは初めてだ。

深呼吸を一つして、
気持ちを落ち着かせる。

「俺、ユリちゃんと別れたんだ」
アヤカをしっかりと見つめて言った。

「うん……聞いた」
戸惑うような表情を見せながら、真っ直ぐに見つめる二つの瞳に
心が震える。

手を伸ばせば届く距離にアヤカがいる。

溢れる想いを込めて
物陰に隠れるようにしながら

そっと

そっと壊れ物の様に抱き締めた。

「……俺じゃ頼りにならないか？」

「……ユウキ？」
驚いて震える声。

その表情は腕の中に隠れている。

「もう、一人で大丈夫なんて言うなよ。辛い思いを一人で溜め込む
姿は見てられない……」

アヤカへの気持ちに気付いてから、自分でも自分を制御出来ない

時がある。

(兄貴の時もそうだった。)

臆病な気持ちと大胆な行動が入り混じる。

初めて抱き締めたその存在の愛しさに心臓がうるさいくらい大きな音を立てている。

「……………」

抱き締められて体を固くしていたアヤカから小さな返事が聞こえてホッとす。

(小さいな……………)

想像よりずっと小さく感じた。力を入れたら壊れそうな程、小さく細い。

小学生の頃は二人とも体格も変わらず、身長は自分の方が低かったのに。

いつのまにかハッキリとしていた男女の差。

そんなことに今更気付く自分に呆れた。

鼻先の柔らかい髪から甘い香りがして、恥ずかしくなる程の自分の気持ちを自覚する。

ダレニモワタシタクナイ

自分以外の男がこの距離に近づく事を考えるだけで沸き上がる激しい嫉妬心と独占欲。

気付いたら想いが言葉になって流れ出ていた。

「ずっと傍にいて、アヤカを守りたい。今までのように、今まで以

上に……」

咳きを聞いて、見上げるアヤカ。見開られた、目のふちが赤い。臆病な自分の勇気の欠片を拾い集めて、心を込めて想いを伝える。

「俺、アヤカが好きだよ」

一瞬黒目がちな瞳が揺れた。すぐ気まずそうに目を逸らして、アヤカが咳く。

「私……私は……」

腕の中の震える小鳥は羽をもがいて飛び去っていく。

「ゴメン……」

逃げるように走り去っていく後ろ姿揺れる黒髪。小さくなっていく背中を呼び止める事もできず、ただ呆然と見送る。

抱き締めた腕にはまだ消えない彼女の柔らかな感触が残っていて、

胸の中にはまだ甘いものが広がっている。

初めて恋をして

初めて抱き締めた

『幼なじみ』の彼女を

困らせたくなくて、縛りたくなくて、

それと同じくらい

気持ちに答えて欲しくて、自分だけを見てほしくて、
矛盾している。

こんなのエゴだってわかってる。

持て余していた気持ちを勢いに任せて吐き出して、自分が楽になりたかっただけかもしれない。

昼休みの終わりを告げる聞き慣れた音声がスピーカーから流れた。

(教室に戻らないと……)

コントロールのきかない想いは
とつとつ出口を見つけて 飛びだして行ってしまったのだ……。

今はただ、その想いが彼女に届くようにと
祈るような気持ちでその場に立ち尽くしていた。

幼なじみのキミと僕（前書き）

ヒロキ再び登場

>ヒロキ目線<

幼なじみのキミと僕

「ヒロくん、手つないで」

恥ずかし気もなく手を伸ばしてくるキミ。

「ヒロくんってなんでも知てるんだね」

感嘆の表情を隠さず真っすぐに見つめるキミの瞳がくすぐったかった。

『弟はいるけど、ないものねだりで妹が欲しかった。だからキミが慕ってくれて僕はとても嬉しい。』

でも、弟がいやでも付いてきて邪魔だなあっていつも思っていた。まあ、かわいい奴だけだね。

にいちゃん、にいちゃんってうるさいけど。

キミにはそう感じないのが不思議。

大人達からも僕とキミがお似合いだって言われてるよ。ちょっと照れ臭いし、子供相手に何言ってるのって思うけど、悪い気はしない。

キミにユウちゃんとヒロくん、どっちがいい？

とか聞いちゃう辺り無神経だと思っけどね。

まだまだキミは子供。

いつかもっと大きくなって、美人になったら考えてあげてもいいよ。

ユウキと取り合うのだけは勘弁。
弟の物を取る程、僕は子供じゃないからさ。』

いつか、机の整理をしていた時、引き出しに挟まった日記の切れ端のようなものを見つけた。

確かに小学生の頃、日記のような手紙のような物をたまに書いていた気がする。

読み返して笑ってしまった。日記の中の『キミ』に明らかに恋している『僕』

それに気付かない振りをして、『僕』は大人になり『キミ』の存在を忘れてしまっていた。

こないだ久々に会って驚いたな。

柔らかい揺れる髪は昔のままだったけど、クルクルとよく動く黒目がちな瞳とほんのりピンク色の口元がアンバランスで逆に魅力的に見えた。

自分の周りにはいないタイプだ。

子供と大人の間には彼女がいる。

(あの表情は可愛かったな……)

顔を近付けただけで赤く染まる頬。

思わずハンドルを握りながらニヤリと思い出し笑いをしてしまう。

(ユウキもある意味可愛げのある反応だったし)

明らかにアヤカに気がある反応。弟のあんな姿を見るのは初めて

だった。

いつも周りに気を遣ってるのか、鈍いのか
自分の気持ちを押し殺すタイプだから、
あそこまでハッキリと敵意を持たれると逆に愉快になってしまう。

色々葛藤してそうだ。

そうほくそ笑む自分も相当捻くれてるんだろうなと思う。
よく周りにも腹黒いって言われるし。天の邪鬼なのだ。

母校が見えてきた。

ユウキやアヤカも通う高校。

大学の帰りやバイトの帰りは自宅までの近道にこの道を通る事が
多い。

カーブを曲がりながらふと校門の方を見る。

見知った人影が目に入った。少しスピードを落としバックミラー
で確認する。

(アヤカ?)

今までも下校する姿を見たことがないわけじゃない。一度くらい
は送った事もあったと思う。

それでもいつもとは違う異様な光景に車を止めた。

校門を出て曲がった所で、数人の頭の悪そうな男たちがアヤカに
絡んでいるのだ。

まるで待ち伏せでもしていたかの様に。
約束していたようにも見えない。

男の一人が逃げるように俯いて早足で歩くアヤカの肩を 掴んだ。

すぐに車から降りて声を掛ける。

「アヤカ！」

「……………ヒロくん？」

途端に泣き出しそんな安堵の表情を見せる。

「この子になんか用でも？ なんなら俺も一緒に聞くけど？」

言ってる間に口惜しそうに顔を背けながら散り散りに去っていく
男たち。

「何だ？ あいつら。大丈夫か？」

怪訝に思いながらアヤカに目を移す。

「あ……………ありがとう。知らない男の人たちなんだけど、急に声かけられてビックリした……………」

端からみても好意的な感じにも見えなかった。

やはり怖かったのか胸を手で押さえて、落ち着かせるようにして
小さく震えている。

さっきの男に掴まれた同じ肩にそっと手をかける。

「……送ってくよ。乗って」

少し驚いてから安心したように「うん……」とアヤカは頷いた。

「これからは少し気を付けた方がいい」

エンジンをかけながらアヤカに話し掛ける。

「え？」

「あんまりタチのいい奴らには見えなかったから。これからは当分友達とか……あ、ユウキに言って一緒に帰ってもらった方がいいんじゃないかな？」

男たちの嫌な雰囲気になった。

「……でも、友達もユウキも、部活とかあって忙しいだろうし……」

貧血持ちのアヤカは部活に入っていない。

周りは色々忙しくしてるのかもしれない。

そう考えながらユウキの名前に過敏に反応したような気がして言葉が続ける。

「ああ、ユウキは彼女いるんだっけ？」

目の端でアヤカの体がビクリと揺れたように見えた。

「彼女とは……別れたって……」

「へえっ。振られたとか？」

「……違っと思っ」

っっていうと振ったのか。

ふーん。とユウキを見直す。アヤカの様子を見るとアヤカにも自

分から言っただけだし、つまり……。

「雄が狙う雌は彼女じゃなかったわけだ」

信号は赤。明らかに動揺するアヤカをまっすぐに見つめる。

「目覚めた雄は本気だよ。どうするの？ アヤカ」
茶化し過ぎたのか黙り込んでしまう。

動きだした車を操りながらチラリと助手席を見ると鞆を抱いて前を見つめていた。

その瞳は潤んでいる。

目の前の信号を左に曲がれば家に着く。

信号は青。アクセルを踏む。

俺は真っすぐに車を走らせた。

「ヒロくん？ どこ行くの？」

不思議そうにこっちを見る視線を感じる。

とくに行き先は考えてなかった。

ただ、このまま返したくなかっただけだから。

「どこ行きたい？」

「……いきなり聞かれても……」

戸惑うアヤカに愉快的な気持ちになる。

「そりゃそうだ」

「ヒロくん？ またからかかってるでしょ？」

見なくてもあのかわいい頬が膨れているのがわかる。

「……俺がアヤカといたいんだ。もう少し付き合ってよ」
信号で止まっている時にアヤカの顔を見ながら言う。断られない
為に。

「……いいけど……どこに？」

頬を染めてしびしびオーケーを出すアヤカの頭をポンポンと叩く。

「サンキユ。そうだなあ、とりあえず海行くか」

「なんで海？」

「定番でしょ？」

若い二人が揃えば海なんだよ。そう言うと、アヤカはオジサンみ
たいとクスクス笑った。

私の好きな人（前書き）

海です。

短いです。

>アヤカ目線<

私の好きな人

わたしのすき
と

かれのすき

どう違うんだろう？

それとも一緒なのかな？

一緒ならどうしてあの時返事もしないで逃げ出してしまったんだ
ろう。

違うなら今まで私は何に恋してたのかな。

ユウキを知らない男の人みたいに感じた。

『あの日』から

私は自分の気持ちを見ないようにしてた。

薄っぺらな自分に気付かないように……。

ユウキが

あんな風に

強引に

抱き締めたりするなんて 思わなかった。

その行為に

ユウキの『本気』を感じた。

「恋に目覚めて急に雄になったユウキに引いた訳だ。」

海で

波打ち際で

素足で

波に飲まれながら。

ヒロくんに言われたあの一言が、

「ユウキに応えられないのはさ。アヤカが本当の恋を知らないからだよ」

胸に突き刺さった。

すきだすきだといいいながら、相手の本気がこわくなる。

今までは私の独り相撲だった。

独りで恋に酔って。

独りで諦めようともがいてたんだ。

初めて向き合って相手の顔が見えた時、我に返った。

海で

砂浜で

タバコをくわえながら

ヒロくんは言った

「ユウキは、そんなお子ちゃまなアヤカがいいんだよ」

ユウキに恋人が来て

別れて

嫌がらせが始まって

告白された。

私の小さな脳ミソは

この目まぐるしい変化に付いていけず

混乱し

心が麻痺していた。

度重なる陰口や嫌がらせ。

もし、私がユウキと付き合ったら、更に嫌がらせはヒートアップするんじゃないか……。

そんな風に考える程、疲れ切って怯える自分もいた。

(ユウキは守りたいって言うてくれたのに……)

私は信じられないでいる。

自分しか見えない。

自分だけが可愛いんだ。

なんて薄っぺらな私の恋心

あんまりに子供っぽくて

がっかりし過ぎて涙が出る。

「俺にすれば？」

空耳かと思った。

「そんな辛くなる相手なんてやめて、俺にすればいい……」

意地悪で

自信家で

憎めない幼なじみが

そつと私を抱き締めて言った。

頭が真っ白になる。

「何も考えなくていい。そのままのアヤカでいればいい。ただ俺の隣にいればいいよ」

冗談には聞こえない。

耳元の少し早い鼓動と

静かで優しい声。

思いがけなくて

本当に

予想もしてなくて

戸惑う

何も考えずに……。

このままの私で。

疲れ切っていた私には
それは本当に
甘い甘い誘惑

このまま頷けば、この堂々巡りから抜け出せるのかな？

誤解や中傷にまみれた毎日を忘れる事が出来る？

この淡い

幼い

恋心も

消し去ることが出来るのかな？

耳元の鼓動と

波の音が

私の思考を鈍らせる。

このまま頷けば……。

そう思えば思う程

胸に込み上げてくる

あの

淡い
幼い
恋心

瞼に浮かぶのは
大好きな

彼の
はにかんだ
柔らかい笑顔。

忍び寄る影（前書き）

すれ違う想い

>ユウキ目線<

忍び寄る影

俺は走りだす。

全力で。

行き先も分からず

ただ闇雲に。

自分の

狭い

弱い心に

責め立てられながら。

キミを想い、走る……。

ずっと昨日の二人の姿が忘れられなかった……。

アヤカに告白して数日が経っていた。

返事もなく、軽く避けられているのには気付いていたけど。自分から近づく勇氣はなかった。

情けないくらい臆病者な自分。

自分勝手に気持ちを押しつけておいて、相手にされなくて拗ねていた。

まさに子供。

その自覚はあるけど
沸き上がる黒い気持ちを押さえられない。

昨日の二人の姿が目には焼き付いて……。

アヤカの家
前に止まる

兄貴の車

その車から降りる

アヤカ。

その姿に驚いた後

二人の関係を

邪推した。

(まさか二人で俺に黙って付き合ってるのか……)

頭に浮かんだ可能性を打ち消すことが出来ず

裏切られたような気分で二人を見ないように家に入る。

ただの嫉妬心だということは分かっていた。

初めての恋は

そんなささやかな事ですら俺をドン底に突き落とす程の力を持つ
ていて……。

おかえりと声をかける母の声を素通りし真っ直ぐに自分の部屋に
籠もった。

人を好きになると

同じくらい

人が憎くなるんだらうか？

愛しいからこそ欲する

手に入らないのが苦しくて

未熟な心はその原因を自分意外の誰かに擦り付ける。

階段を登る足音

扉をノックしながら呼ぶ

「ユウキ？」

兄貴の声

「……居るんだろ？ 開けるぞ」

返事も待たず勝手に扉を開ける。いつものことだ。

でも今日は兄貴の行動の無神経さに苛立って思わず睨み付ける。

「何か？」

「なんだよ虫の居どころが悪いなあ」

無言でいると勝手に話しだす。

「アヤカが……」

自分でも分かるくらい全身がビクリと揺れた。

聞きたくない……。

でも

それ以上に気になる。

アヤカの事なら何でも。

どんな事でも。

俺の態度を不信に思っただけか続かない兄貴の言葉を促す。

「……アヤカが、何？」

緊張と葛藤に声が震える。

「……いや、今日変な男達がアヤカに絡んでたから、注意してやって欲しいんだけど」

その言い方に荒れた心が鼻白む。

「……まるで自分の女みたいな言い方だな」

苛立ちを隠せない。

まるきり子供じみた態度に自分でも嫌になる。

「さっきの見てたんだ。……相変わらずガキだなあ」

顔を見なくても分かる。（小馬鹿にしゃがって）

曖昧な返事といつもの上から目線の態度に腹が立った。

「話しが済んだら出てってくれよ」

強く言い放つ俺に

「はいはい。とりあえず、アヤカの事、頼んだよ」

最後まで軽くあしらうような余裕の態度をとられていますますます苛々した。

兄貴のような余裕の無い

兄貴のような軽快さや

兄貴のような愛想もない自分に。

女の扱いは比べものにならない……。

兄貴と比較すると自分の欠点しか思いつかなくなる。

アヤカも……。

アヤカにも比べられてるのだろうか。

曖昧にはぐらかされたけど、兄貴がアヤカと一緒にいた事実だ。告白してからアヤカの態度に自信を失っていた俺は、僅かに残っていた期待も兄貴への劣等感で粉々に打ち砕かれてしまっていた。

今思うと、

初めての恋に、

自分の気持ちに必死で

冷静さを失ってた。

周りが何も見えなくなっていたんだ。

だからまさか、

部活帰りにアヤカがいるとは思わなくて……。

動揺した。

アヤカは何か言おうとしてたのに……。

(俺はまったく聞こうとしなかった)

ほとんど無視して先に学校を出る。

学校が見えなくなる角を曲がった時
車の音を聞いたような気がした。

ふいに、兄貴の言葉を思い出して校門まで戻った時。
俺は自分の馬鹿さ加減に吐き気がしたんだ……。

真つ暗な校門には誰もいなかった。

まばらに明かりのついた校舎。

もう遅いこの時間帯、校門付近には人影もなく、

ただ

持ち主を失った鞆が

無造作に転がっていた

アヤカの。

俺は走りだす。

全力で。

行き先も分からず

ただ闇雲に。

自分の

狭い

弱い心に

責め立てられながら。

もしアヤカに何かあったら……。
考えるだけで吐きそうになる胃液を押し戻し、
躓き、
転げそうになりながらも

呼吸することも忘れ。
緊張に汗すらかかず
ただひたすらに

キミを想い、走る……。。

長い夜〜エミ〜（前書き）

混沌とした長い夜の始まり。

>エミ目線<

長い夜〜エミ〜

ケータイが鳴る。

メールではない着信音。

時間はもうすぐ21時。

ディスプレイされてる名前を確認する。

「アヤカ？ どうしたの？」

でも聞こえてきた声は予想外の相手だった……。

「新藤……俺。ユウキ」

その声の深刻さと異常な事態に私は嫌な予感がした。
手短かに話を聞く。

「ユウキくん、今どこにいるの？……とにかく、私もすぐ行くから
家族に一言言っただけで家を出る。」

自転車を跨ぐ。心臓が不安に煽られて大きな音を立てる。

アヤカ……！

場所は学校から余り離れてないコンビニ。

その前にある車止めになだれて座ってる人影に目を止める。

「ユウキくん！」

「……新藤」

ひとしきり走って探したんだろう。疲れと不安でひどい顔してる。

その傍にあるアヤカの鞆が目に入る。沸き上がる焦燥感。

息の上がつた呼吸を整えながら聞く。

「……警察には？」

「学校のすぐ傍の、あそこにある交番には行った」

「なんて？」

「まだ誘拐や事件とは言えないし、捜索願いは家族からしか出せないとか……とにかく話にならなかった」

無力な自分に憤りを感じているように震える肩。

見ているも胸が痛む程のユウキくんの焦りを感じる。

そして、私の胸にも現実として同じ物が広がっていく。

「兄貴に……」

「兄貴ってヒロキ先輩？」

ユウキくんのお兄さんは中・高ともOB。人気があって有名で、私も数回面識があった。

ユウキくんは頷いて続ける。

「サキおばさん。アヤカの母さんにも伝えるように頼んだ……兄貴ももうすぐここに来るって」

話ながら思い詰めたように俯く。

「……アヤカが連れ去られてからもう一時間近く経つんだよ！ なのに俺は何もできない」

苛立たしそうにアスファルトを叩く。

よく見るとユウキくんの制服の膝も肘も汚れていた。手にはもう何度も何かに当たったのか擦り傷があり赤くなっている。

「……私達に出来る事を探そう」

気付かないうちに強く握っていた拳を開きハンドルを握りサドルを跨ぐ。

「心当たりあるのか？」

ユウキくんにすぎるようにつめられて目を逸らす。
まだ何とも言えない。

「特には無いけど……一つだけ。また連絡するから！」
そう言い放って私は走りだした。

学校に寄り、
必要な情報を手に入れる。

先生達もほとんど残っていなかった。
一応職員室を覗く。

「どうした？新藤。こんな時間に」

（ああ、この人じゃダメだ）

委員長なんかやってると、理解ある教師とそうでない教師が嫌でも分かってくる。悪いけどこの人は「使えない」教師だ。

声をかけてきた先生をみてすぐにそう思ったけど一応話を通す。

「三組の住谷さんが不審者に連れ去られた可能性があるんです」

「はあ！？ 住谷って住谷アヤカか？ 確かか？ 誰か見た奴がいるのか？」

目撃者はいないと言うと

「やっぱりな。まだ21時過ぎだぞ。住谷も彼氏なんかとデートじゃないのか？」

したり顔でそう続ける。

(……やっぱり役に立たない)

他にも同じ様なタイプの先生しか見当たらなかった。

時間を無駄にしたくない。まだ話し続ける先生を適当にかわして学校を後にする。

一分でも早くアヤカを見つけたかった。

ペダルを踏む足に力がこもる。

アヤカに謝りたい。

アヤカの一歩傍にいて

アヤカに近づく危険に一番早く気付く事が出来たはずなのに……。

私は結局自分の事しか見てなかったんだ。

気を抜くと涙腺がゆるむ。

心配で心配で、
今のアヤカの状況を想像するだけで鼻がツンとした。でも……。

(泣かない)

まだ何があつた訳じゃない。
まだアヤカの顔を見ていない。
今泣いても何も解決しないから……。
泣かない。

ただ悔しかった。

こんなことになるなんて……。
と思う反面、

私はこうゆうこともあり得ると知っていたんじゃないかと自分を疑う。

アヤカに目を付けていた三年の女子に派手な付き合いがあるタイプの生徒がいる事には気付いていた。

それも関係してるかもしれない。

私はもっと色々注意すべきだった。
それが出来るのにしなかつたんだ。

アヤカの信頼を裏切っていた。

(大好きなのに……)

どこかで嫉妬していたんだ。
私も……。
アヤカの魅力を。

だから理解できるつもりだった。

彼女の気持ちも。

調べた住所を頼りに家を探す。分かりやすく大通り沿いであつて助かった。

息を整えた後「有川」の表札の横のインターホンを押した。

優しそうなお母さんの声にホッとすする。

「夜分遅くすいません。委員長の新藤です。今度の学校行事の事で急ぎの伝言があるんですが、ユリさんご在宅ですか？」

私は用意しておいたセリフで答える。

本人はさぞかし驚いているだろう。私達の接点はほとんど無い。直接家に来るなんて今時少ないし。しかももうすぐ22時。

深呼吸をする。

(陰口を言っていた、あの三年の女子の内一人はマネージャーだったはず)

ユリちゃんが何か知っているかもしれない。

私は不安を押し殺し

僅かな希望をかけて

祈るような気持ちで本人が出てくるのを待った。

長い夜〜アヤカ〜(前書き)

長い夜・序章

>アヤカ目線<

長い夜〜アヤカ〜

今、私は

暗闇の中にいた。

天井が高く、埃っぽい広いスペースに何かが並んでいる。段ボールやコンテナだろうか。窓は小さな明かり取りが並んでいる程度。月明かりもなく星さえ見えない。

トタンを打つような小さな雨音が聞こえる。

暗闇に目が慣れると

ぼんやり

縛られた足首が

目に入った。

後ろ手に縛られた

手首の紐も

簡単には外れそうもない。

(どれくらい時間が経ったんだろう?)

暗い倉庫のような場所で手足を縛られている……。想像したこともない状況に緊張と不安で胸がムカムカした。私は頭痛のする重くダルい体を何かの台にそっと預ける。

雨音に混じって外から男たちの声が微かに聞こえてきた。

低い笑い声。

沸き上がる不安から現実逃避するように目を閉じる。

意識が重く沈んでいく……。

暗い闇の中

ユウキの声

ユウキの大きな手

力強いユウキの腕を

思い出す。

それと同時に

傷ついた目をして

私を冷たく突き放し

一人歩き去っていく

ユウキの背中を

思い出していた。

ユウキの、あんな目。初めて見た……。

グラウンドに降りる階段で部活が終わるのを待っていた。

ユウキが必ず通る道

伝えたい事があった。

でも、部室から最後に出てきたユウキは私に気付くと、驚いて気
まずそうに

目を逸らした……。

(え?)

ドクンッと心臓が不安なリズムを打つ。

そのまま私の前を素通りしていくユウキ。

まるで、存在しないかのように。その背中に慌てて声をかける。

「ま、待って！ ユウキ。話があるの」「私の言葉に一度は止まってくれたけど

「……聞きたくない」

聞こえるか聞こえないかわからないくらい小さな、傷ついた声で呟いて。

ユウキは行ってしまった。

突然できた二人の間の溝に動揺して、私はユウキの背中を見ながら呆然と立ち尽くした。

冷たく突き放されてはじめて、ユウキがいつでも優しく受け入れてくれる。そう思ってた自分に気付く。

私は告白してくれたユウキを押し退けて、返事も曖昧にしたままユウキを避けてたのに。

「調子に乗ってる」と言う陰口を思い出す。

その通りだ。

無視されて気まずそうに避けられる事が、こんなにも辛いなんて知らなかった。

いつも優しいユウキ。私を好きだと言ってくれたユウキの拒絶するような背中が……忘れられない。

もう何粒目かわからない涙が頬を伝う。

あの背中を追い掛けてたかった。

もう一度振り向いて欲しくて、話を聞いて欲しくて。

でも、私はただ動けずにいた。甘やかされた心は、また拒絶される事が怖くて、何も言葉にする事が出来なかった。

気が付いた時には男たちに囲まれていた。

「彼氏に振られたのかな？ 俺たちと遊ぼうよ」

ニヤニヤ笑う見覚えのある顔。

（昨日の男たちだ）

私の顔色が変わるのを見ると後ろにいた一人にハンカチで口を塞がれる。

「おっと、大声は出さないですよ」

声をあげようと大きく息を吸い込むと目の前がクラリと揺れた。

いつもの貧血とは違う、薬品の匂いに気分が悪くなる。

「悪いけど、ちょっと付き合ってもらおうよ」

薄れていく意識の中

男たちの顔と拒絶されたユウキの顔が交互に回って……。

頭痛と共に目覚めると、この場所にいた。

ヒロくんにも注意するように言われたのに……。

昨日、海でヒロくんを抱きしめられた時。

自分の気持ちに自信が持てなくなつて、一度はユウキを忘れようと思つた。

でも、そう思えば思う程

溢れる気持ち
流れる涙

戸惑う私に

「そんなにユウキがいいんだ……」
ってヒロくんは呆れるように呟いた。

そうかこんなにもユウキが好きだったんだ。
そしてその単純な言葉は私の胸にストンと落ちた。
ユウキじゃないと駄目なんだ。
ヒロくんの言葉で自覚した。

「まだアヤカは何にも伝えてないんだろ？」
あの時ヒロくんはそう言ってくれたんだ。

そう、私はまだ何もユウキに伝えてない。

今すぐにも数時間前に戻ってユウキの背中を追い掛けたかった。

拒絶されようと

何されようと

かまわない。

ずっと私の中にあっただ気持ち。

「ユウキが好き」

形を変え色を変えて少しずつ育ててきた想い。
色々あって見えなくなってたけど、それは確かにここにあった。
ユウキに好きだと言われてから、想像以上に成長していた。自分

でも気付かないくらいのスピードと大きさで……。

数時間前は、いつでもこの想いを伝えられると思っていた。また、普通に朝が来て、もう一度。何度でもチャンスがあると思っていた。

背中が見えなくなるまで見送った、あの時までは……。

倉庫らしい、重い扉が開く音がして、私の意識は現実を引き戻される。

数人の黒い人影。

顔はよく見えない。

私は出来るだけ体を小さくして物陰に隠れる。

「アヤカちゃん。ちょっと俺たちと遊ぼうぜー」
ふざけ合いながら男たちが近づいてくる。

逃げようにも動けない。縛られた手足に苛立つ。自分の非力さや無力さが悔しい……。

黒い影が

近づくとつれ

沸き上がる恐怖心。

影から伸びてきた手が

触れる。

「可愛い顔して、男好きって、ホント？」

嫌悪感で思考が止まる。

「うわあ、足もスベスベ」

スカートから出てる足を触られて吐き気がする程の悪寒を感じる。
「触らないで！」

睨み付けて大声をあげる。

「いいね〜。この状況でその強気」

後ろの男が愉快そうに笑う。

「ここ港の倉庫だから、いくら声出しても誰も聞こえないよ」
暗くても男たちが厭らしく笑うのが分かる。

「こんな可愛い子とやれるなんて俺たち役得だなあ〜」

更に伸びる手を縛られた両足で蹴って避ける。

「元気だな〜、まあそのくらい嫌がってた方が画になるよね」

そう言われて後ろの一人がビデオカメラのようなものをこっちに
向けているのに初めてきづいた。

(この人たち、本気だ……)

体中の血の気が引く。

迫ってくる男たちに力の限り大声で叫んだ。

「いやあ！ 近寄らないで!!」

ユウキ!!

無意識にユウキを呼ぶ。

ただひたすらに

ユウキに会いたかった。

神様なんているのかわからないけど、祈った。

どうか、

願いが叶うなら。

今すぐに

この想いを彼に

伝えさせてください。

男たちの汚れた手に

穢れる前に……。

長い夜〜ユリ〜（前書き）

後悔と自責の念

心の変化

> ユリ目線 <

* 前話と入れ換えるかもしれません。

長い夜〜ユリ〜

「私は何も知らない……帰って！」

住谷さんが車で不審者に連れ去られた。

そう言う新藤さんの突然の訪問に、私はすごく驚いた。

彼女はいつもの冷静な雰囲気からは考えられないくらい真剣で必死で。

動揺した私は扉を開けてすぐに追い返えそうとした。

「お願い！ 有川さん！ アヤカを助け出したいの。手を貸して欲しい」

それでも扉に体を挟み込むように食い下がる彼女に戸惑う。

住谷さんが……？

いい気味だと、

そう思い切れないのはなぜだろう。

曖昧に愛想を振りまいて男たちを誑かしてたのは本当だ。

（彼女に悪気がないにしても……）

恋愛に慣れてなくて不器用。

彼女をしばらく見ていてそう思うようになった。

それは私の知ってる誰かに似ていた。

「アヤカが、怪しい男たちに連れ去られた可能性があるの……」
扉の隙間から

また改めてそう言われて、先輩から聞いた話を思い出す。

まさか……本当に。

まっすぐに見つめる新藤さんから目を逸らしたまま、場所を変えたいと伝える。

住谷さんへの嫌がらせ、

それは私に同情してくれた友達が、小さな嫌がらせを何度かした事が発端だった。

最初の頃は確かに、いい気味だと思えた。私が傷ついたのは住谷さんのせいなんだから。

ただそれが、先輩マネージャーに漏れて……。三年生にも住谷さんの事を悪く思ってる人が何人かいて。火種が広がっていくのはあつという間だった。

『私の友達も住谷 アヤカが気に入らないって言ってたよ。近々住谷さんやられちゃうかもね』

親しくしてるマネージャーの先輩が、私に漏らした言葉に、嬉しいと言うよりゾツとした。

『やられるって……』
動揺を隠さず尋ねると、

『友達が気に入ってる男子が住谷さんを好きになっちゃって、男を取られたとか言って騒いでるの。クラブとかもつと怪しい場所にも出入りしてるタイプの子だから、今日も男友達に襲わせるとか話してて』

可笑しそうに話を続ける。

『あの子、一度気に入らない事があるとトコトンやるからなあ』
先輩は笑いながら言っただけ……。私は笑えなかった。

でもあの時はふざけて話してるだけだと思っていた。いつもの陰口みたいなものだって。

「何でもいい。思い出したら、気付いたことがあれば教えて欲しい」
新藤さんの小さな説得にハッと我に返る。

近くの小さな公園に移動しても、私は俯いて黙り続けていた。

私の心が、迷い彷徨う。

「……元はと言えば彼女が悪いのよ。ユウキくんや色んな男子を誑かしたりして」

ためらいながらも思い切って本音をぶつける。

新藤さんの顔色が変わった。でも彼女は何も言わない。

「私が別れる事になったのだって住谷さんのせいだし……」
軽く新藤さんを睨んでそう言ってみただけ……。

「その事については私は何も言えない……でも」
優しく静かに新藤さんが私に語り掛ける。

「多分、誰も悪く無いんだよ。有川さんもユウキくんも……アヤカも」

(ダレモワルクナイ?)

その言葉に激しく心を揺さ振られる。

ユウキくんが住谷さんを好きになって……すごく辛かった。だから、振られてすぐの時は本当に住谷さんが憎かった。住谷さんへの嫌がらせも当然だと思った。

誰かのせいにしてないと前に進めなかったから。

鬩りのある彼女を見る度チリチリと痛む胸に気付かない振りをして、

自分の傷を癒す為に、目をつむって耳を塞いで、自分の事だけを考えるようにしてた。

本当の彼女を
見ないように。

見たら気付いてしまう
自分の汚さ
自分の弱さを……。

(時間が、こんな風に傷を癒すなんて知らなかったから)

下唇を噛んで堪える涙が……地面に落ちる。

公園の時計を見た。
もうすぐ22時。

新藤さんが言う連れ去られた時間からもう二時間になる。

もし、先輩が言っていたことが本当に実行されていたら……。

その考えに……背筋に悪寒が走る。涙を拭い、新藤さんを見た。

辛抱強く、私が答えるのを待っている。いつものように気丈に振る舞ってるけど、その体は小さく震えていた。

迷ってる時間はないんだ。

「電話、かけさせて」

一瞬驚いた顔をして、真剣な目をして頷く。

「……どうぞ」

私は携帯を開く。深呼吸をして勇気を振り絞る。電話帳から掛け慣れない番号に発信する。

今夜、住谷さんに何かあれば、私はきっと後悔する。

「……夜分遅くすみません。有川ですが、三浦先輩ですか？ 前に話してた……住谷さんの事なんですが」

「住谷 アヤカの事って何よ？」

「彼女が男たちに連れ去られたんです……。先輩、何か知りませんか？」

隣では新藤さんが息をのんで会話を聞いている。

「ああ、その事。今更何？……元はと言えばユリちゃん達が始めたことでしょう？」

先輩はしばらく黙った後呆れたような口調で苛立たし気に言い放った。

責められるのは覚悟していた……『私が始めたこと』その言葉が

予想以上に重く肩にのしかかる。

なにより先輩が否定しない事に改めて衝撃を受ける。本当に男たちに襲わせたんだ……。

「……すみません。身勝手なのはわかっています。けど……今すぐ居場所を知りたいんです」

おかしいくらい声が震えている。

「……三浦先輩。お願いします。知っているなら、教えてください」

住谷さんが

何をされているのか

私には想像もつかない。

後悔が

不安が

罪悪感が

次々と私を襲う。

人を傷つけても

幸せにはなれない。

同じように自分が傷つくだけだから。

私は、それをもう実感し始めていた。

(私が始めたことなら、私が止めないといけないんだ……)

今は

ただ

彼女を助けたかった。

長い夜〜ユウキ〜（前書き）

守りたいものが
傷つくことに傷ついて。

（ユウキ目線）

長い夜〜ユウキ〜

あの日

あの夜

俺たちにとって最悪な
でも特別な夜

何も起こらなければよかった。

でも何も起こらなければ気付かなかっただろう。

自分より

何よりも大切な
守るべきもの。

あの時決めたんだ。
もう決して

キミを傷つけないと。

俺はキミを想い続けるよ。

これからも、

ずっと、ずっと。

ただ、

今でも

聞けない事がある。

アヤカ

俺はあの夜

本当にキミを救うことが出来たのかな？

雨が振り出した。

コンビニでちょうど兄貴と合流した時、アヤカの携帯に新藤から連絡が入った。

「埠頭の倉庫にいるって！ 会社名は……」

新藤が言う社名を暗記する。

「私もすぐ追うから……。早く行って！」

すぐに兄貴の車で向かう。気持ちが焦って信号がやたらに多く感じた。

もうアヤカが誰を好きだろうと、誰のものであるうと関係ない。

とにかく無事でいてほしい。早く救い出したい！

それだけだった。

兄貴は、忠告を聞かなかった俺を責めることなく、真っ直ぐ前を見ながらハンドルを握って、車中でも口数が少なかった。

ただ、一言。

「俺はアヤカに振られたんだ」

そう言った。

「今、アヤカが一番会いたいのはお前なんだよ」

その言葉に

俺は

その日の自分の態度を
胸が潰れそうな程
後悔したんだ。

振り出した雨がだんだん大粒になってきた。
雨が車のフロントガラスを強く叩きだした頃
埠頭に着いた。

埠頭には倉庫が立ち並び入り組んでいる。

新藤から聞いた会社名をナビで検索したけど、場所は特定されな
かった。

おおよその場所で車を止める。そこから飛び出してもつれるよう
に走りだす。

「アヤカー!!」

ただとにかく叫び続けた。

倉庫の屋根を叩く雨音が大きく音を立てて邪魔をする。

ふと目が止まる。

立ち並ぶ暗い倉庫

ただ一つだけ、

怪しく小さな光りが漏れている。

そこへ向かって夢中で走りだす。

僅かに空いてる倉庫の扉から漏れだす。

その光は

アヤカを照らしていた。

制服のシャツの
ボタンは千切れ、
乱され

白い肌が
露になっていた。

そこに男の
汚らしい手が
張り付いている。

スカートを
捲し上げられて
開かれる足。

彼女を照らす
その光源。
それは……。

(ビデオカメラ……)

泣き叫ぶアヤカ

そしてアヤカの頬が男に殴られた。

全てがスローに見えた。

生まれて初めて
人に殺意を感じた。

「おいっユウキ！」

後ろから兄貴の声がした。それに構わず、

俺は走りだす。

まず手前のビデオカメラの男を飛び蹴りを入れる。

うめき声とビデオカメラが飛んで地面に叩きつけられる音が倉庫に響く。

振り返る二人の男

アヤカの身体をまさぐり、押さえている奴の顔面を殴り飛ばして、転がる腹に蹴を入れる。

それから、啞然とした間抜け面で下半身を出してる奴の胸ぐらを掴んで、飛び出ている汚らしいモノごと蹴り潰す。

よろけて倒れるそいつの横っ腹をさらに勢い良く蹴り入れた。

何度も

何度も

何度も

「……キ！ やめる！ ユウキ！！ 死ぬぞ！」

兄貴に両脇を抱えられ止められるまでがむしゃらに蹴った。

気が付けばそいつは血を吐いて痙攣していた。

やっと我に返る。

男のその姿をみても
納まらない怒り。

その時、後ろから小さな小さな声がした。

「ユ、ウキ？」

まだぐったりと倒れたまま、こっちを見てる。

アヤカ！

兄貴の腕を解いて駆け付ける。

「アヤカ……」

言葉を失う。

すぐに制服のジャケットを脱いでアヤカにかけた。

殴られてぼうっとしてるのか視線が定まらない、腫れぼったく涙
に濡れた瞳。

顔半分の目の周りが真っ青になって頬は赤く腫れている。口の端
からは血が見えていた。多分口の中が切れているんだろう。

よく見るとアヤカの手首は後ろ手に縛られていた。

足元にも紐が落ちていて、足首にも縛られた後があることに気付
く。

再び今すぐにも男達を皆殺しにしてやりたい衝動が沸き上がる。

「本当に……ユウキ？」

声が擦れ、囁くような声が聞こえて踏み留まる。

まだぼんやりとした揺れる瞳がこつちを見ていた。

「……そうだよ」

目を合わせて安心するように見つめる。

そつと手首の紐を解いていく。

胸が、千切れそうさ。

なのに涙はでない。

沸き上がる憎しみが止まらない。

男達も

自分も、許せなかった。

悔しくて。

虚しくて。

彼女を守れなかった

こんな目に合わせてしまった、自分が……。

小さく震える細い体

その愛しくてたまらない存在を抱き締める。

「もう、大丈夫。大丈夫だよ……」

自由になった細い腕が弱々しく背中にまわる。

しがみ付くように……。

「ユウキ……ユウキ」

小さな擦れた涙声で何度も何度も名前を呼ぶ。

どれだけ

俺を呼んでいたんだろう。

どんな思いで……。

俺はただ、ただ、
彼女を抱き締める。

ゴメン

無視してゴメン

置きざりにしてゴメン

こんな酷い目に合わせて

ゴメン

ゴメン

ゴメン……。

アヤカ……ゴメン。

心の中で

言葉に出来ない謝罪を何度も何度も繰り返す。

何より大切に

誰より愛しい

アヤカ

彼女がふと体を離して朦朧とした瞳で俺を探す。

「ユウキ……」

「……ここに居るよ」

俺が答えると、

安心したように

微笑んで

言ったんだ。

「ユウキ……好きだよ」

そして彼女は
瞳を閉じた。

思わず
涙が
零れた

一番欲しいはずの言葉が、胸の一番痛い所に突き刺さる。
意識を失った彼女を抱き締めながら大声で泣いた。

サイレンの音が聞こえる。

駆け寄ってくる幾つかの足音。

アヤカが運び出された後も、何もかもを無視して俺は崩れるように泣き続けた。

今でも思い出すと胸が軋む。
自分の無力さや
自分の幼さ

狂いそうになるくらいの怒りと目眩がするくらいの愛しさを。

そして最後に必ず思っただ。

アヤカ

俺はキミに
想われる権利が
あるんだろうか。

長い夜ゝ夜明けゝ（前書き）

長かった夜が明ける。

（アヤカ目線）

長い夜〜夜明け〜

倉庫の屋根を叩く雨音が激しくなってきた。

聞こえる音は雨音と

厭らしい男たちの笑い声。

泣いても、

叫んでも、

男達は近づいてくる。

シャツのボタンが飛び散る。

恐怖と嫌悪感で震えが止まらない。胸をまさぐる手に吐き気がした。

涙でぐちゃぐちゃになった顔が無機質なビデオで撮られていく。

「おい、これ邪魔だな」

足の紐を解かれたとき、（今だ！）

私は力一杯男の体を蹴った。男は勢いよく後ろに倒れ込む。

（やった……）

ホッとしたのも束の間だった。

「……つてーなあ、何すんだよ！ このオンナア」

思いもよらない反撃に逆上した男の手が振り上げられる。

次の瞬間

目から星が散って見えた。

頭と頬がビリビリする。

殴られたんだ

分かるまで数秒かった。

鉄の錆のような味が口の中に広がる。
私の心が恐怖に支配される。

開かれる脚。

興奮した血走る男達の目。

下着が取り除かれ絶望感に襲われる。

殴られた頬が痛い。

口の中が腫れてきたのがわかる。

怖い

怖い

怖い

(でも……嫌……!)

それでも

殴られようと、

何されようと

こんな奴らに犯られるのは絶対に嫌だった。

左の脚は目の前の、右の脚はもう一人の男が無遠慮に胸を触りながら掴んでいる。足の付け根を触れようとする直前に、渾身の力で足をばたつかせ抵抗した。

「嫌っ!! 触らないで!」

下着を取り払ったことで目の前の事に夢中になっていたのか、二人の男達がよろける。

「……いい加減、じっとしてろ！」
更に殴られる。

今度は歯を食い縛っていたけど、倍以上の痛みを意識が遠退く。

「ジタバタしやがって、まだ後に二人控えてんだよ！ めんどくせえなあ、もうこのまま突っ込んでしまっぞ！」

朦朧としながら、このまま犯されることを覚悟した。

縛られて擦れた手首

殴られた頬

切れた口の中の肉

叫び過ぎて枯れた喉

泣き疲れて割れるように痛む頭。

身体中から悲鳴が聞こえる。

(……ユウキ)

それでもユウキを想った。

私の身体が穢れても

彼は私を好きだと言ってくれるだろうか……。

私を抱きしめてくれるかな。

腫れた頬を伝う涙の感触。

そこからは記憶が曖昧になっている。

二発目に殴られてから、軽く意識が飛んでいた。

微かにユウキの匂いと体温を覚えてる。

そして、

次に会ったら

絶対絶対言おうと

決めていた言葉を

伝えた事も。

「ユウキ……好きだよ」

目覚めたら

白い天井

白い壁

白いベッド

白いカーテンの向こうから青白い光。

鳥のさえずりが聞こえる。

(「ユウ、どユウ?」)

体を起こす。

体中が痛んで顔をしかめる。頬と頭、そして手首には何か巻かれていた。

(包帯……病院……?)

壁にかけられた時計は五時をさしている。

ベッドの横にある椅子には座ってうつうつとしてるHミの姿があった。

「エミ……？」

(どうしてここに……？)

私の声に気付いて目を覚ます。その顔は疲労でやつれて見えた。

「アヤカ……」

赤い目で瞬きを繰り返し、くしゃくしゃの顔をして私を強く抱き締める。

言葉も無く、泣いているのか肩が揺れている。

きつと、夜通し心配してくれていたに違いない。震える彼女の背中を抱く。

記憶の片隅のユウキの声が聞こえる。

もう大丈夫。大丈夫だよ。

本当に、もう大丈夫なんだ。強く抱き締めるエミの温かい体温で、やっと現実味の無かった「今」を実感する。

夜は明けたのだ。

あの男たちから、埃っぽい暗闇から本当に逃げ出すことが出来たんだ……。

ほっと息を吐くと同時に涙がこぼれた。

エミと二人、

抱き合ったまま

気が済むまで

一緒に泣いた。

しばらくすると個室のドアがノックされて、お母さんと一緒にがっしりとした体型のスーツを着た二人の男の人が入ってきた。

警察手帳を開いて見せてくれる。

若い方の刑事さんが思ったより優しい声で私に話しかけた。

「辛い思いをしたね。君を襲った男たちは三人共捕まえたから、安心してほしい。少し話を聞かせてもらっていいかな？」

調書を作る為にいくつかの質問をされる。

連れ去られた時間と場所、車や男たちの特徴、襲われた場所やその状況も男たちの供述と一致しているか確認の為にいくつか聞かれた。ついさっきの生々しい出来事。

私は吐き気を抑えながらぼつりぼつりと答える。お母さんとエミが目を伏せ、涙ぐむのが分かる。お母さんは私以上に辛そうに口元を押さえていた。

そして話終えた私の頭を抱くようにしてそっと髪を撫でてくれた。その温かい手が張り詰めていた緊張を解いてくれる。

刑事さんは改めて、私を襲った男たちは三人とも現行犯逮捕して、今警察で取り調べ中であること。

三人とも強制わいせつ罪や婦女暴行の前科があることを教えてくれた。

あのビデオも警察が押収しており、卑劣で悪質な犯行で、厳重に処罰をされるであろう事。いつでも何かあれば話を聞かし、相談に乗ってくれると付け加えてくれた。

取り調べではやはり三年女子の名前が出てきたらしい。思わずエミを見ると

「私に任せて」

と微笑んで頷いた。

その頼もしさに安堵する。

「今回、我々の出番がない程の事件解決の手際に驚いてるんだよ」

二人の内少し年配の刑事さんがメモしていた手帳を仕舞い、ゆっくり私を見つめて話します。

「こういつた事件は事が明るみに出にくい。被害者からの届けがあつて初めて発覚することが残念ながら多いんだ。今回のように前もつて我々に情報が無く、現行犯逮捕できる事は稀だと思う」

ゆっくり私とエミの顔を見た。

「君を救い出し、再犯を繰り返す犯罪者を逮捕できたのは、一重に君の勇気と友人達の協力があつたからこそだと我々も感謝しているんだ」

三人の内一人はしばらく意識が戻らず警察病院行きだったと教えてくれた。

「体を張つて君を救つた、彼にも。一言伝えておいてくれないかな」

そう言つて二人の刑事さん達は帰つて行つた。

(私はみんなに守られてる)

エミからヒロくんも探してくれていた事を聞いた。ユリちゃんが、居場所を聞き出してくれたことも……。

なぜこんな事になつたのかはわからない。

男たちが捕まつても、私の傷は簡単には癒えないだろう。

それでも、みんながいる。

エミが
ヒロくんが
家族が

そしてユウキが。

夕方には検査結果が出て、明日には退院出来ることになった。
エミは面会ギリギリまで一緒にいてくれた。

また夜が来る。

その夜はお母さんが泊まってくれて、久しぶりにゆっくり色んな話をした。本当に、色んな話を。

寝むる前に、

私の手を握って
言ってくれた

お母さんの言葉。

「アヤカ、頑張ったね」

抱え込んでいた、不安や戸惑い。孤独感が、ゆっくり溶けだして
いくのを感じた。

(一人じゃないんだ)
心から、そう思った。

電気の消えたベッドの上で目を開ける。
明かりを消しても真っ暗闇じゃない。

隣から聞こえる寝息
窓からの月明かり

私の心の中にある光。

ユウキ。今何してる？何を思ってる？

ユウキはあの倉庫に来た。男たちの行為を止めて、私を助け出してくれたのは間違いない。

ユウキは私のあの時の姿を見たんだ。あの悲惨な姿を。

(どう思っただろう……)

考えると複雑な気持ちになって胸が苦しい。でも、もう時間は戻せない。何も無かったことにはならないんだ。ユウキを想う私の気持ちに迷いはなかった。

「ユウキ……会いたいよ」

呟きが夜闇に消えていく。

ただ会いたい。

顔が見たい。

声が聞きたい。

私は、翌日退院して体の傷が癒えるまで数日間学校を休んだ。

でも

ユウキが

私に会いに

来てくれることは

一度も無かったんだ。

キミという光（前書き）

ユウキの迷い

ユウキ目線

キミという光

いつまでも自分を責めていた。

子供染みた自分の行動でアヤカを危険にさらした事が許せなくて。

アヤカの痛み

アヤカの悲しみ

アヤカの苦しみ

その何も分かってやれない。その傷の癒し方も分からない。そんな自分がかくかくかった。

俺は何もしてやれない。

想えば想うほどアヤカに会いに行く事が出来なくなっていった。

166

あの日、

アヤカが気を失ってすぐ、誰かが手配してくれた救急車とパトカーが到着し、彼女は運び出されていった後も、俺はひたすら自分の無力さに泣き崩れていた。

どうやって部屋に戻って来たかも覚えていない。

新藤から『アヤカが目覚めた』ことや『退院が決まった』ことのもメールが何度か来ていた。

でも俺は、何もなかったように過ごしていた。

部活と学校へ、現実逃避していたんだ。

いつものように朝練をこなし、授業を受け、部活をこなし帰る

だけの生活。

新藤が動いてくれたのか、学校でアヤカに起こった事を知ってる人間はほとんどいなかった。

「派手に夜遊びしてた三年女子が自宅謹慎になって、卒業も危ないらしいよ」

気になっていた、あの三年女子の話はタカヤから聞いた。

「ふーん、そうなんだ」 部活の筋トレ中。

興味のないふりをしながらタカヤの話に耳を傾ける。

「たしかその三年女子が、アヤカちゃんへの嫌がらせ仕切ってたじゃないかな。もうあんな嫌がらせなくなるかもね」

「……そうだな……」

俺は、何も知らないはずのタカヤの言葉に心底ほつとした。

そんなある日、

部活へ向かおうと教室を出たら、

「なんでアヤカに会いにいかないの？」

腕組みをして新藤が待ち伏せていた。

苛立つように投げ掛けられた言葉。

「まだもう少し学校来れないし……。アヤカ寂しがつてるよ」

アヤカが退院してもすぐには学校に来てない事は気になっていた。まだ顔の痣が残ってるからと聞いて無意識に拳に力が入る。

たしかに二・三日で治るような感じではなかった……。まだ何もかもがリアルで、黒い気持ちが悪く襲ってくる。

「……新藤、三年女子の件裏に手を回したの？」
話題を変えたくて話をふる。

「別に。たまたまあの人の進路担当の先生が話が分かる人だっただけよ」

さらりとなんでも無い事のように言う新藤を格好良いと思った。

「とにかく、アヤカに早く会いに行ってあげて。今あの子が一番会いたいのユウキくんだから」

新藤の言葉が胸にずしりと重く響いた。

アヤカのいない学校

それは何の色もない世界。
ずっと一緒にいたアヤカ。

アヤカの初恋の相手に気づいたのはいつだっただろう。

相手は何でも出来る兄貴

気づかない振りをして、自分の心に芽吹いた気持ちをを無意識に封印していた。

他に好きな子も出来ず。

思いきって付き合った結果ただ傷つけた。

ユリちゃんとは、ほとんど話してない。

部活でも辛そうに目を逸らされる。

一度、すれ違い様「ごめんなさい」と呟くのを聞いたけど。返事を返す前に走り去って行ってしまった。

彼女の事を責める気持ちにはならない。

きっかけを作ったのは自分だから……。

(俺は本当に鈍いんだ……)

気づくのがいつも遅い。こんな自分が心底嫌だった。

ユウキ……好きだよ。

耳の奥に残るアヤカの声

掠れた小さな声だったけど、ハッキリ俺の胸に届いた言葉。

こんな自分を思ってくれてる、

誰よりも何よりも

守りたい

大切な存在。

だからこそ自分が許せない。

一方的な子供っぽい勘違いでアヤカを無視した。

あの時のアヤカの顔。

男たちに傷つけられたアヤカの姿。

俺はきつと一生忘れられないだろう。

こんな自分より、兄貴や他の奴の方がアヤカをもっと……。

(もっとと上手く幸せに出来るんじゃないのかな)

俺にはアヤカに想われる資格なんかない。

もう二度と

傷つけたくない。

俺は臆病になっていた。一人グルグル

思考の迷路に

囚われて、

身動きがとれない。

苦しくて苦しくて

でも出口の見えない毎日

ずっと光を探していた。

その日は試合前と言つことのでミーティングのみ。いつも部活は早く切り上げられる。
めずらしく明るい時間の帰宅。

家への帰り道、いつもはなんとなく通りすぎる公園の人影に気づく。

その揺れる黒髪、

心の奥で

ずっと追い求めていた。

あの華奢な後ろ姿。

何かのスイッチが入ったように、モノクロの世界が色付く。

理屈じゃない。

ただ顔を見たい。

声が聞きたい。

理由なんて何でもいい。

鮮やかに沸き上がる想い。

そこからどうしたか余り覚えていない。
でも気がついたら

アヤカは腕の中にいた。

(やっぱり考えるのは苦手だ)

ありのまま全てを伝えようと思った。

まずはそこから。

今はとにかく

驚いてゆつくり振り返る アヤカの顔が
見たかった。

新しいキミと私(前書き)

二人の出口。

>アヤカ目線<

新しいキミと私

今誰に会いたいですか？

そう聞かれたら迷わずユウキの名前を挙げるだろう。

顔が見たい

声が聞きたい

ユウキの笑顔が見たい

あの日から一度も会わないまま明日から学校へ行く。

もし嫌われてたら？

もう心変わりしてたら？

そんな不安もあるけど

とにかく会いたい。

毎日そんな風に考えてた。

体は元気だしもう痣も目立たない。

暇を持て余して近所を散歩していた。

ここの公園は学校の帰り道だし、もしかしたら姿が見えるかも。

そう考えたりもしたけど。

部活もあるし、期待はしてなかったんだ。

太陽が傾いて、風が頬を撫でる。

今日は天気良かったけど風が吹くと、薄手のカーデでは少し肌寒い。

(そろそろ帰ろうかな)

冷えてきた体を抱きしめる。風が吹く、ザワザワツツと公園の裏の雑木林が音を立てた。

突然、後ろから回される誰かの腕。

「きゃっ……………」

びっくりして小さな声を上げる。

けど、なぜか嫌じゃない、懐かしいような温かさ。

「…………アヤカ」

耳元で囁く声に、心臓がバクバク鳴り響く。

ずっとこの声が聞きたかったから。

顔だけゆっくり振り返るとユウキの瞳とぶつかった。恥ずかしげな瞳は不安げに揺れている。

「ユウキ……………」

思わず声が震える。

「あ…………ゴメン……………」

我に返ったように、慌てて離れようとするユウキの背中を追いかけて思わず手を回す。

逃げないで…………。

言葉にならない想い。

思い切りユウキの胸に顔を埋めるかたちになった。腕を回したユウキの体は予想以上にがっしりとしていて、改めて男性として意識してしまう。

自分の大胆な行動に恥ずかしくなってユウキの顔が見られない。

でも今離したら、ダメだと思った。

ユウキの体温が私に伝わる。

ユウキの大きな心臓の音も。

ユウキの腕がそつと私を包みこむ。

「「ゴメン……」」

二人の声がハモる。

思わず顔を見合わせて笑った。

「あっち、座ろうか」

照れ隠しのように、ユウキが端にある木製のベンチを指さして促す。

急に体が離されて間を通る風に冷たさを感じながら、「うん」と頷いて、歩きだすユウキに付いていく。

「退院してからも、ずっと……会いにいなくてゴメン」

座つてすぐ、前を向いたまま気まずそうにユウキが呟いた。

「うん……」

まだ目の前にユウキがいるのも信じられない気分だった。

ユウキに告白された事がすぐく前のように感じていた。やっと素直になれた自分の想いも、正直伝わってる自信がなくて。すぐく

宙ぶらりんで……。

「……不安だったよ……苦しかった」

正直な気持ちを吐き出す。

ユウキが辛そうに眉間に皺を寄せる。

でも……。

「でもね、それはユウキのせいじゃないから」

一番伝えたかったこと。

ユウキがゆつくりと私を見る。

「あの日あんなことがあった事も、ユウキが会いに来なくて辛かったのも、全部私の気持ちの問題なの」

会わない間に自分の気持ちを見つめ続けて、私はそう答えを出していた。

誰のせいでもない。

誰も責められない。

まっすぐにユウキを見つめて言う。

納得がいかないようにユウキがすぐ言葉を返す。

「でも、あの日俺がアヤカを無視したりして、一人にしなれば…

…」

「私だってユウキを無視してた。告白してくれてから、二人の関係が変わるのが怖くなって、ユウキを無視してた」

驚くような表情で私を見つめるユウキに言い聞かすように。

「ユウキはどう思ってた？ 不安になったかな。誤解した？」

一度見舞いに来てくれたヒロくんから聞いた。

『アイツは俺たちの事誤解してたんだよ』って。

なんであんな風は無視したのかそれで理解出来た。

「一緒だよ」

長い付き合いで、それを責任感の強いユウキが一人で自分を責めてるだろうことも想像できたから。

「そうかな……」

視線をそらして戸惑うように呟く。言葉は少ないけど、ユウキの周りの張り詰めた雰囲気柔らかくなった気がした。そして私は一番聞きたいことを尋ねる決心をする。

「みんなから、聞いたよ。……ユウキは私を助けて出してくれたんだよね」

雨音、

男たちの荒い息、

ビデオのライト。

思わず声が震える。

いけない。心配させたくない。そう思うのに不安な鼓動が喉を震わす。

「見たん、だよな？それでも、ユウキは、私の事嫌になって、ない？」

聞きたくない……でもちゃんと知らない。

日にちが過ぎて冷静になればなる程、あの場所のあのタイミングのあの状況、そしてあの状態の私を、ユウキに見られた事が、それを聞くのが、怖くて怖くて。

大丈夫……何度も自分に言い聞かせたけど。ユウキのの口から気持ちや聞かないまま、先に進めない。そう感じていた。

今度は私が目を逸らして俯く。寒気を感じて、勝手に体がカタカタ震えだす。

沈黙がすごく長く感じた。

(手……)

ベンチの端を無意識に強く掴んでいた手を取って、ユウキが握ってくれる。

「本当は……俺なんかより他の誰かの方がアヤカを幸せに出来るんじゃないかと思った。幼なじみに、戻った方がいいのになって」

ズキンズキン胸が痛む。一番言われたくない言葉にショックを隠せない。

思わずユウキを見つめた。

ユウキは前を向いている。

そんなのやだ！って叫びたかった。

でも声が出ない。

目の前が涙で、

不安で

どンドン曇っていく。

やっぱり……もう無理なの？

すれ違い過ぎた時間を取り戻したい。

でももう何もなかった頃には戻れない。

(ただの幼なじみに戻る事は私には出来ない……)

私の傷も

ユウキの傷も

もうなかった事には

出来ないから。

誰のせいでもない

誰も責められない

私は自分の気持ちを一度もちゃんと伝えて無いことに気づいた。

それでも私はユウキが好きだから……。

「私…… 「それでも俺はアヤカが好きなんだ」

私が言おうとした言葉が、被さる様にユウキの声で聞こえてきた。

「やっぱり無理。他の奴に絶対アヤカを渡したくないし」

こつちを見てハニカミながら笑うユウキ。

「本当に？」

思わず聞き返す。

一瞬茶色がかった瞳が真剣に光って繋いだ手にそっとユウキの唇が当てられる。

「本気」

その行為に驚いて

頬を染め目を見開く。

「何度も何度も諦めようと思ったけど、やっぱりダメだ……他の誰かじゃダメなんだ。俺がアヤカを守りたい。俺がアヤカの傍にいたい」

私を見つめる

ユウキの真剣な目

熱い言葉が

触れられた部分を伝わって

どんどん私の中に響いて染み込んでくる。

心臓の動きが
激しすぎて
息が出来ない。

告白されるのは二度目。

でも、まったく違う人から言われているような感覚に襲われる。

はくはくと酸素を求める魚のように。

息を整える余裕もないまま、まだ言っていない言葉を懸命に吐き出す。

「私も。ユウキじゃないと、ダメだよ……ユウキが好きだよ」

嬉しくても涙がでることを初めて体験した。

涙声で笑えるくらい情けない声になって、恥ずかしかった。

照れ合つ瞳で見つめ合いながら、握る手の指を絡ませ合つ。

恋人同士のように。

繋がった気持ちを実感する。

「……！」

その時、

一瞬

ユウキの唇が

私の唇に、

触れた……。

そして、
きつく
抱きしめれる。

「ユ、ユウキ……！」

「やべえ、俺、今めっちゃ嬉しい……」

ユウキの思いがけない大胆さは私の一番切ない部分を絶妙なタイミングで刺激する。

恥ずかしくて堪らないのに、嬉しくて仕方ない。

ユウキが同じ気持ちなのは体の全てから伝わってきた。

「大好きだよ、ユウキ」

ユウキの腕の中から、涙でくちやくちやな顔で見上げる。

言いたくて
言いたくて
堪らなかった。

やっと伝わった。

「俺も……」

潤む瞳が色っぽい。

見たことないユウキ。

これからも私の知らないままユウキをたくさん見たい。
私の事も一杯知って欲しい。

小さな頃のユウキも

今のユウキも

これからのユウキも

全部全部私に下さい。

再び近づくユウキに

私は目を閉じる。

たくさんすれ違いや誤解、悲しみや痛みがこの今に繋がってる。

それなら私は全てを受け入れよう。

あの暗闇がこの温もりが続いている事を知った私には、もう恐いものなんてなにもないから。

進みだそう。

光差す出口へ。

一緒に……。

未来へ（前書き）

その後の二人と周りの変化

> 工三目線 <

未来へ

理想の恋人達

あの二人がそう噂されるようになったのはいつからだろう？

私たちは三年になった。

試合での活躍はもちろん、部員達の信頼もあってユウキくんはキヤプテンに選ばれていた。

サッカー部は大会を勝ち進み、ユウキくんは冬の大会までサッカーを続けることになったらしい。

大学は某有名体育大学にサッカー推薦で行くと聞いている。

私はもう学級委員長ではないのだけど、いつのまにか生徒会の副会長を任されることになって毎日忙しくしている。

アヤカは

「エミもユウキも凄すぎだよ。私だけ置いてかれてる気分」
とか拗ねてたけど、

去年から我が稜星高校で開催される事になった「ミス稜星」のコンテスト、

全校人気投票で一位に輝いたのは紛れもなく「住谷 アヤカ」その人だ。

「もう、言わないで！」

この話題をすると必ず顔を真っ赤にしてそう怒られる。

まあ、勝手にエントリーしたのは私だから、選ばれた時のアヤカの動揺具合は端から見ても、相当なもので。「本当にびっくりしたんだから。思い出す度居たたまれない……。」と、今でもチクチク言われるけど。

実は「有川 ユリ」ちゃんもコンテストに友達推薦で参加していて、かなり上位だった。

それがきっかけでアヤカとユリちゃんは親しくなって、三年は偶然同じクラス。

すっかりわだかまりも解けて仲良くなっているから人の縁って不思議だ。

「その点では、エミに感謝してる」

ユリちゃんのお陰で私はアヤカに恨まれずにすんでいる。アヤカは未熟な私のアヤカを妬む気持ちもユリちゃんのこともまったく気にしないという。

彼女の心の広さには本当に感服する。

とにかく、それをきっかけに、アヤカを取り巻く周りの空気は変わった。

以前の。ううん、それ以上の羨望の眼差し。

嫌がらせを受けたあの日とは違う注目の存在。

実際、ユウキさんと付き合うようになって本当にアヤカは綺麗になっただ。

子供っぽく見えた丸い顔立ちや仕草が、女らしさと柔らかな色香を漂わせるようになって、

男女共に魅了する、その幸せ一杯の笑顔はたまらなく可愛く魅力

的だ。

今年も「ミス稜星」はアヤカに違いないと私はこっさり確信している。

アヤカに密かに想いを寄せる男子も以前より確実に増えているだろうけど、相手があユウキくんではみんな諦めるしかない。

キャプテンを務めるユウキくんは正直いって本当にカッコいい。

もともと目鼻立ちがハッキリしていて整った顔立ち。

照れ屋で赤面性だったからあまり目立たなかったけど、あユウキくんは見違えるように変わった。

愛するものに愛されていること

大切な者をどんな事からも守る決意

それらが彼に大きな自信と余裕、そして適度な緊張感を与えて、別人のようになっていた。

照れ屋で特に女子とは恥ずかしそうにぼそぼそと話す感じだったのに、

誰とでもまっすぐ目を見つめて話しをする。

はしゃぐわけではないけど明るくいつも楽しそうな雰囲気。

幸せな者が持つ特有のあの空気。

もちろんモテまくってるが本人はまったくどこ吹く風、相手にはしない。丁寧に断り続けている。

アヤカとユウキくんは必ず一緒に帰っている。遅いときはグラウンドやマネージャー室にいてもあるらしい。

人がいて安全な場所。

「アヤカと必ず一緒に帰る為」

ユウキくんがキャプテンを受ける時に先生に出した条件。

もちろん私も後押ししたけど。顧問は理解ある先生だったから話しはすぐ通った。

理想の恋人達

二人を見てると羨ましくなる時がある。私はまだそこまでの相手とは出逢ってないから。

そういつと決まってアヤカは言う。

「エミは必ず出逢えるよ。それとも、もう出逢ってるのにまだ気づいてないだけかも……よく周りを見渡してみても、気持ちはまだ眠ってるだけかもしれないよ。運命の人は意外と身近にいるかも」

そして私も笑ってこう返す。

「経験者の言葉は説得力があるね」

って。すると必ずアヤカはハミカミながらも自信を持って頷く。

「そつだよ」

すれ違っても、遠回りしたからこそ今がある。

二人を見ていると本当にそう思える。

永遠って何か、まだ幼い私たちにはわからない。

出逢いがあるなら、

別れもある。

私たちにはまだこれからも沢山のさよならが待っているはずだ。

でも、二人をみていると

信じられる気がする。

ずっと一緒にいるべき相手は必ずいると。

一度二人で帰る姿を見送ったことがある。

固く握り合う手と手。

傾く夕日に二人の影が長く長く伸びていたんだ。

どこまでも

どこまでも長く

それはずっとずっとどこまでも続いていく気がした……ずっと先の、未来へ。

未来へ（後書き）

初めての小説、一旦終わりです。

読みにくい話にお付き合いいただき、本当に本当にありがとうございます。

これを励みにまた小説を書いていきたいと思ってます。

またお会いできる日を夢みて

2010.5.8 h i r o

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0947k/>

さよならラララ

2011年9月18日20時41分発行